

プロスポーツチームが根差す「地域」とは？

ーマルチスケールで展開する FC 琉球をめぐる多様な主体の思惑と戦略ー

藤 川 慎 也

I はじめに

1. 「地域」を志向する日本のプロスポーツ

スポーツは政治的・経済的・文化的性質を有しており、近年、学術的関心を高めている。地理学においてもスポーツに関する事象を空間的な視点から理解しようとする研究が欧米を中心に増えつつある (Wagner, 1981 ; Bale, 2003 ; Rosso, 2007 ; ペイル, 1997 ; 杉本, 1999 ; 呉羽, 2002)。また Bale (1988) は、スポーツにおける「場所」の意味も重要視している。Bale によれば、特にサッカーは、本拠地となる固定された競技場を有するチームスポーツであるため、場所との結びつきが密接であるという。たとえば Hague and Mercer (1998) は、スコットランドのカーコーディにおいて、《レイス・ローヴァーズ FC》が地元住民にとって場所の記憶の媒体であることを明らかにした (以下、サッカーチーム名は《 》, その他のスポーツのチーム名は〈 〉で表記する)。また Fløysand and Jakobsen (2007) は、ノルウェーのソンドルにおいて《ソンドル・フットボール》が場所の商品化の過程で主導的役割を担ったことを明らかにした。さらに Shobe (2008) は、スペインのカタルーニャにおいて《FC バルセロナ》が場所の政治と流動的に結びつきながらカタルーニャ人の創られた伝統になる様相を示し、Shulman (2004) は、スペイン・バスク地方の《アスレティック・ビルバオ》がローカルなアイデンティティを体現していることを明らかにした。

一方、日本の場合、スポーツと「地域」の関係に注目が集まっている。たとえば、2007 年の「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正により、地方自治体のスポーツ政策が教育委員会から首長部局へと移管され、経済的な地域活性化の政策などと連動するようになった。また御園 (2012) によれば、2011 年に施行された「スポーツ基本法」と 2012 年に策定された「スポーツ基本計画」では、スポーツが地域社会の構築や活性化に対して重要な役割を果たすものとして位置づけられているという。

こうした動きの背景には、1993 年に開幕した日本

プロサッカーリーグ (通称「J リーグ」) の存在がある。日本では高度経済成長期以降、プロ野球チームのような、企業にスポンサードされたスポーツチームが興隆してきた。それに対して J リーグは、ローカルな地域に支援体制があるプロサッカーチームを日本各地に発足させることを理念としている。たとえば J リーグに加盟するチームは、本拠地となる「ホームタウン」を定めることが義務づけられている。そのような地域密着を志向した J リーグの一定の成功に加え、バブル経済の崩壊に伴う企業スポーツの再編の結果、日本のさまざまなプロスポーツチームの活動基盤は企業から地域へと移行している (齋藤・川原, 2012)。ヨーロッパでは、小規模な自治体においても膨大な数のチームが存在するという歴史的・社会的基盤の上にプロサッカーリーグが成立してきたが、日本においては、J リーグが組織的に指導してチームを地域に根差させようとしている (寺阪, 2006)。

2. 研究の目的と方法

日本経済研究所 (2009) は、J リーグに所属するチームの存在が経済効果や社会貢献活動等で地域にもたらす肯定的な効果を報告した。しかし、債務超過に苦しみ、経営難に陥るチームの実態も明らかになっており、地域を基盤とした運営体制の問題点が浮き彫りとなっている。2013 年 10 月には、《FC 岐阜》の関係者やサポーターたちが参加して「FC 岐阜は岐阜に必要か？」をテーマにした会議が開かれた。日本では、プロスポーツチームと地域の関係性を考察することが喫緊の課題となっている。

しかし、上述の法律や計画・理念等が強調する「地域」の意味は判然としない。「地域密着」「地域に根差す」などと述べられる際の「地域」とは何を指しているのだろうか。本稿は次の二点に焦点を当て、プロスポーツチームと地域関係を論じたい。

一点目は、地理的スケールの重層性である。山崎 (2005 ; 2011) によれば、社会現象の実相を理解するためには、グローバル・ナショナル・ローカルのように空間的に重層化されたスケールでその過程を

捉え、スケール間に展開する諸力の相互作用とその地理的様相を考察する必要があるという。スポーツについても同様のことが言えるであろう。実際、本稿が対象とするサッカーというスポーツは、境界を越えた資本や選手の流動といったグローバル化が進行しており、ローカルな地域においては、地元住民のチームに対する受容・支援・抵抗といった多様な反応が生じている (Storey, 2011)。

二点目は、多様な主体が特定のプロスポーツチームの活動に関わる理由とそのための戦略である。先行研究は、市民・行政・企業等の各主体がチームに対してどのような支援を行っているのか、どのように関わっているのかなどということにのみ注目してきた (川久保, 1998; 武藤, 2009; 山田, 2009; 永山, 2010; 柴田, 2011)。しかし、チームの活動が成立する背景には各主体の思惑とそれに基づく戦略があり、それぞれの主体は相互に何かしらの反応を示し合うと考えられる。どのような主体が、どのようなスケールの地域のどのような社会的基盤に即して、どのように戦略的に連携しているのかを検討する必要がある。

以上を踏まえて本研究では、日本におけるプロスポーツチームの活動の展開を、地理的スケールの重層性と各主体の戦略的な連携という視点から明らかにし、プロスポーツチームと地域の関係性を考察する。そのために本研究では、沖縄県に所在するプロサッカーチーム《FC 琉球》を事例として取り上げる。後述するように、《FC 琉球》は J リーグ入会を目指した活動を展開しており、「地域」に根差そうとしているクラブである。

筆者は 2013 年 1 月 7 日から 18 日までと 2013 年 10 月 24 日から 11 月 10 日までの期間、那覇市を中心に沖縄県に滞在し、《FC 琉球》の運営法人、沖縄県庁、沖縄市役所、那覇市役所、八重瀬町役場、沖縄県サッカー協会、沖縄市観光協会、後援会、サポーター等に聞き取りを行い、当該クラブに関する資料を入手した。また、《FC 琉球》を含む沖縄県内のプロスポーツチームの試合の様子 (会場設備、会場演出、観客の動き等) を観察調査した。具体的には、2013 年 11 月 3 日に沖縄市陸上競技場で開催されたサッカーの試合《FC 琉球》対《Y.S.C.C.》、2013 年 11 月 2 日に那覇市民体育館で開催されたバスケットボールの試合《琉球ゴールデンキングス》対《京都ハンナリーズ》、2013 年 11 月 4 日に浦添市民体育館で開催されたハンドボールの試合《琉球コラソン》対《豊田合成株式会社ハンドボールチーム》をそれぞれ

観戦した。

本稿の構成は以下のとおりである。まず II 章では、J リーグ、《FC 琉球》、沖縄県の概要をそれぞれ述べる。次に III 章では、《FC 琉球》の J リーグ入会に向けた活動の展開について検討する。IV 章では、観客から見た《FC 琉球》と地域の関係性を検討する。最後に V 章で研究成果をまとめる。

なお、J リーグではチームのことをクラブと呼んでいる。本研究では、J リーグに関する事柄を取り上げる際は「クラブ」、それ以外のスポーツの場合は「チーム」の語を用いる。また、本稿で使用するデータはすべて 2014 年 1 月時点のものである。

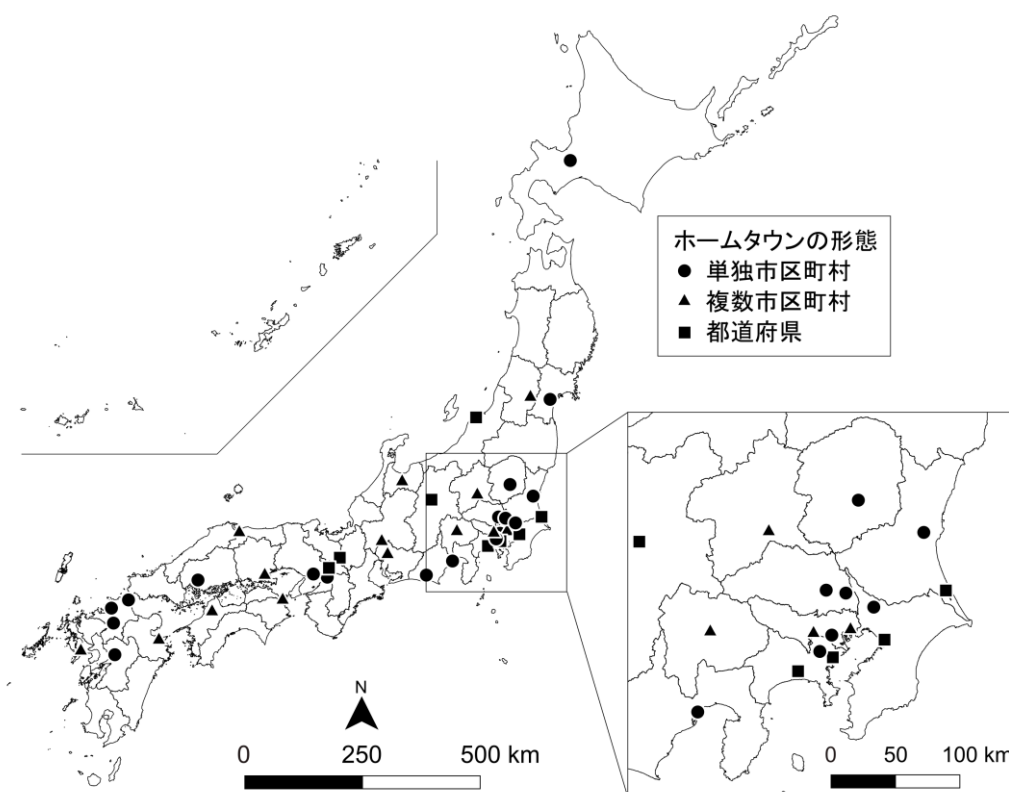
II 研究対象の概要

1. J リーグの理念と入会条件

1996 年に発表された「J リーグ百年構想」では、ホームタウンの市民・行政・企業が三位一体となった支援体制を持ち、その町のコミュニティとして発展する「地域に根差したスポーツクラブ」を核としたスポーツ文化の振興が J リーグの理念であるとされている。そして、J リーグ規約第 21 条第 2 項では、「J クラブはホームタウンにおいて、地域社会と一体となったクラブ作り (社会貢献活動を含む) を行い、サッカーをはじめとするスポーツの普及および振興に努めなければならない」とされている。J リーグにおけるホームタウンとは、「J クラブと地域社会が一体となって実現する、スポーツが生活に溶け込み、人々が心身の健康と生活の楽しみを享受することができる町」である。

J リーグでは、基本的に一つのクラブに対して一つの市区町村がホームタウンとして定められる。そして、定められた自治体が所在する都道府県は、クラブの「活動区域」に設定される。ただし、次の三つの条件を満たす場合には、複数の市区町村または都道府県を指定することができる。すなわち、①自治体および都道府県サッカー協会から全面的な支援が得られること、②支援の中核をなし、市区町村の取りまとめ役となる自治体を定めること、③活動拠点となる市区町村を定めること、である。

ホームタウンを単独の市区町村に設定しているのは 18 クラブ、複数の市区町村とするのは 8 クラブ、全県を範囲とするのは 12 クラブである (第 1 図)。ただし、全県を設定したクラブについては中心となる市区町村が定められている。たとえば、《ザスパクサツ群馬》は「草津町、前橋市を中心とする全県」



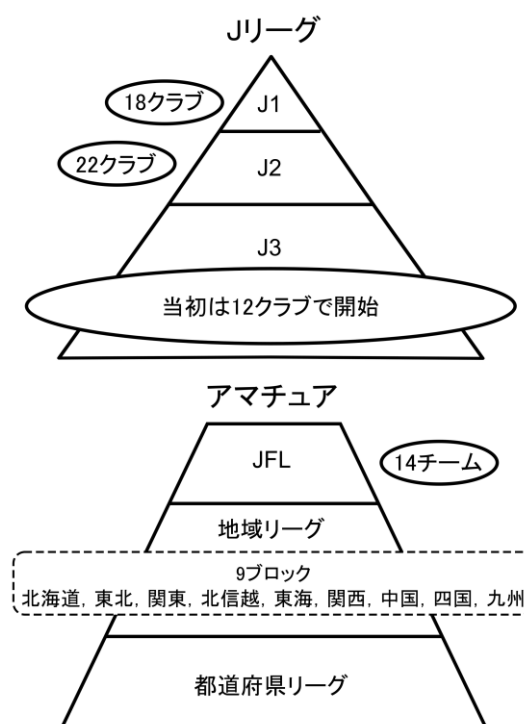
第1図 2013年度におけるJリーグ加盟クラブの分布とホームタウンの形態

注) Jリーグ公式サイト (<https://www.jleague.jp/>) を基に筆者作成。

をホームタウンに設定している¹⁾。後述するように、本稿が対象とする《FC琉球》も「沖縄市を中心とする全県」をホームタウンとして設定している。

2014年度の日本におけるサッカーリーグの構成は、第2図のようになっている。日本のサッカーリーグは、J1を頂点とするピラミッド構造である。Jリーグに次ぐリーグは、全国リーグの「日本フットボールリーグ（通称「JFL」）」であり、その次に地域リーグ、都道府県リーグと続く。これらはいずれもアマチュアリーグである。所属するリーグにおいて順位要件を満たせば、そのクラブは上のリーグへと昇格できる。ただし、JFLからJリーグに昇格するためには、競技成績だけではなく、Jリーグ準加盟規程に基づく条件を満たし、Jリーグ準加盟クラブとして承認されなければならない。

Jリーグの入会条件で特筆すべき点は、競技場、ファン・後援会、ホームタウンといった点で地域性が重視されていることである（第1表）。たとえば、椅子席数等の基準を満たす競技場をホームスタジアムとして設定したり、自治体や後援会の支援を受けたりする必要がある。これらの条件は厳しく、過去には準加盟が承認されなかったクラブ、または準加盟



第2図 2014年度における日本のサッカーリーグの構成

注) J3 準備室特設サイト (<http://www.j3league.jp/>) を基に筆者作成。

第1表 Jリーグの主な入会条件

競技	<ul style="list-style-type: none"> ・JFLでの順位要件 ・トップチームにS級、育成にB級以上の指導者 ・プロA契約選手5名以上
育成	<ul style="list-style-type: none"> ・2種、3種、4種チームの活動
普及活動	<ul style="list-style-type: none"> ・スクールまたはクリニックを実施
人事体制・組織運営	<ul style="list-style-type: none"> ・サッカークラブ運営が主たる業務 ・株式会社または公益法人もしくは特定非営利活動法人 ・取締役役ホームタウン居住または勤務者が1名以上 ・常勤役員1名以上、常勤社員4名以上
財務	<ul style="list-style-type: none"> ・年間収入1億5千万円程度 ・債務超過でない ・入会後広告収入として1億円以上確保
施設	<ul style="list-style-type: none"> ・練習できる場所の確保 ・基準を満たすスタジアム <ul style="list-style-type: none"> － 椅子席5千以上 (J1は1万5千、J2は1万以上) － リーグ戦を80%以上開催 など
ファン・後援会	<ul style="list-style-type: none"> ・平均3千人以上の観客数 ・ファンクラブ、後援会などの整備
ホームタウン	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームタウンを決定 ・支援内容を首長名の文書で提出
都道府県サッカー協会	<ul style="list-style-type: none"> ・支援内容を文書で提出

注) Jリーグ公式サイト (<https://www.jleague.jp/>) を基に筆者作成。

を申請せずにJリーグ入会を断念したクラブがあった。そこで、2012年9月にJリーグ準加盟規程が改定され、ホームスタジアムの設定要件が緩和された²⁾。2014年度には新しくJ3が設立されるが、それも入会条件の緩和が意図されている。2013年2月にJ3新設が発表されたことを受けて複数のクラブが新たに準加盟申請を行い、2013年12月には準加盟が承認された11クラブのJ3加盟が決定した。その中の一つが《FC琉球》である。

2. 《FC琉球》のJ3加盟までの苦難

《FC琉球》は2003年に、当時九州リーグに所属していた《沖縄かりゆしFC》から集団退団した選手たちが中心となって発足した。《沖縄かりゆしFC》は、かりゆしホテルズという企業グループのサッカーチームであり、集団退団時には法人化されていた。沖縄県の地方紙『琉球新報』の取材に対して選手たちは、「沖縄からJリーグ」を目標に頑張ってきたが、社長から勝利至上主義よりも地域密着型を目指すという発言があったことが集団退団の理由であると述べている（琉球新報 2002年12月2日）。

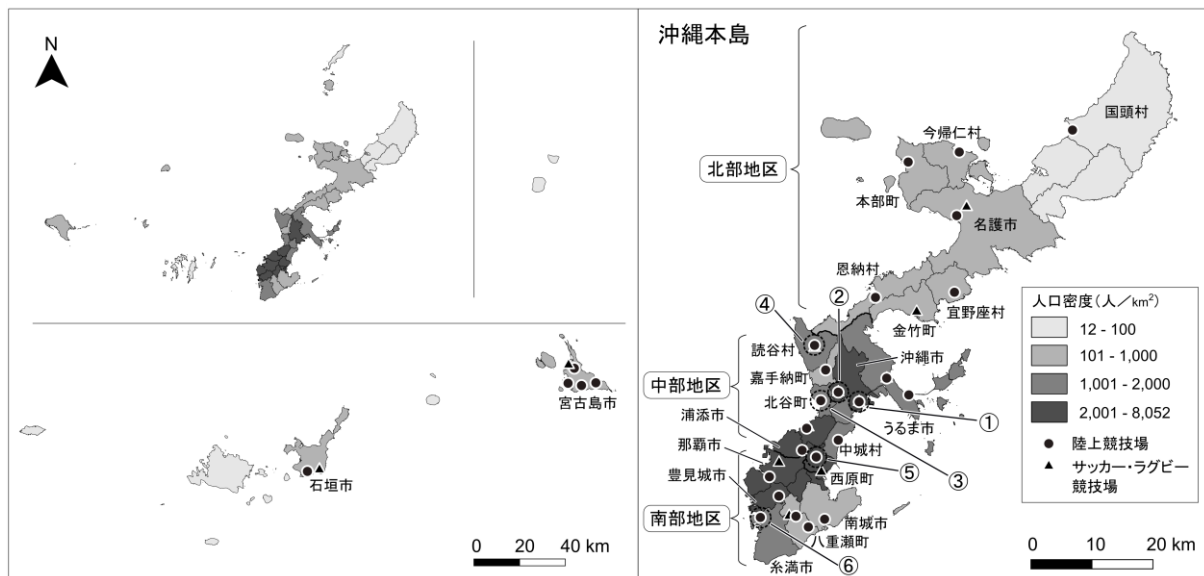
《FC琉球》は、発足したばかりの2003年度に沖縄県リーグ3部北で優勝したことが評価され、沖縄県サッカー協会の推薦を受けて特別に県リーグ1部へ昇格した。2004年度は1部で優勝して九州リーグへ昇格し、2005年度には各地域リーグの上位チーム

が集う全国地域リーグ決勝大会で優勝した。そして2006年度からは、沖縄県を本拠地とするチームとしては初めてJFLに参入した。その後、Jリーグ入会が決定する2013年度まで降格することはなかった。しかし、順位は2006年度から年度ごとに、全18チーム中14位、17位、16位、16位、10位、9位、9位³⁾、11位と、中位から下位に留まっている。

《FC琉球》はJFL昇格以降、Jリーグ入会のために競技面以外での活動も進め、3度の準加盟申請を行った。2008年に最初の申請を行ったが、不認可という審査結果を受けた。2011年の申請では継続審議となり、Jリーグから、①ホームスタジアムとなる沖縄県総合運動公園陸上競技場（以下、沖縄県陸）の改修工事の明確化、②地元と連携した支援体制の確立という二つの課題を提示された。そして、J3新設を受けて2013年6月に再度申請し、準加盟が承認された。ただし、3度目の申請時に《FC琉球》の代表取締役社長は、記者会見において「現状は組織体制や経営面でまだ、問題が残っています」と発言している⁴⁾。

3. 沖縄県におけるスポーツの基盤

《FC琉球》の活動区域である沖縄県は11市11町19村の41市町村により構成され、人口は約140万である。その約8割が、県庁所在地の那覇市を中心とする沖縄本島中南部圏に集中している（第3図）。



第3図 沖縄県内の陸上競技場とサッカー・ラグビー球技場の分布

注) 図中の丸数字は第4図と対応している。沖縄県『Jリーグ規格スタジアム整備基礎調査報告書』を基に筆者作成。

沖縄県の産業構造について、内閣府沖縄総合事務局（2013）によれば、2012年度の県内総生産に占める第二次、第三次産業の割合は、それぞれ12.4%、85.5%であり、全国水準と比べると第三次産業の割合が高いことが特徴的である。その中でも特に観光・リゾート産業を中心とするサービス業の割合（26.9%）が高く、全国の割合（18.9%）を上回る。そうした状況を背景として、沖縄県と沖縄市は、《FC琉球》の存在をスポーツ・ツーリズムに繋がるものとして位置づけている（後述）。

沖縄県内における2012年度の日本サッカー協会登録選手数は、県の人口千人当たり約10.4人であり、全国で4番目に多い。日本サッカー協会登録チーム数は、人口千人当たり約0.3チームであり、全国で6番目に多い。また、《FC琉球》の他に71のサッカーチームが沖縄県を本拠地としている。すなわち、九州リーグの2チーム、沖縄県リーグ1部の8チーム、2部の20チーム、3部の41チームである（第2図参照）。しかし、2013年4月時点でJリーグのクラブに在籍している沖縄県出身選手数は6人であり、それほど多くはない。人口10万人当たりでは約0.4人であり、全国で34番目である。また、2006年に国民体育大会（通称「国体」）のサッカー競技・少年男子において沖縄県代表チームが優勝したが、それ以降、全国レベルで目立った成績は見られない。

沖縄県内における《FC琉球》以外のプロスポーツチームは、日本プロバスケットボールリーグ（通称「bjリーグ」）に所属する〈琉球ゴールデンキング

ス〉と、日本ハンドボールリーグに所属する〈琉球ゴールデンキングス〉のみである。2006年に発足した〈琉球ゴールデンキングス〉は、2008年度と2011年度にbjリーグで優勝した強豪チームである。同じく2006年に発足した〈琉球ゴールデンキングス〉は、企業チームが大半を占める日本ハンドボールリーグの中で唯一のプロチームである。

また沖縄県は、プロ野球のキャンプ地としても有名であり、初めてキャンプ地として選定されてから30年以上の歴史がある。2012年度は韓国等の国外チームも含む10チームのキャンプ地となった。さらに、1999年以降、全国高等学校野球選手権大会・選抜高等学校野球大会（通称「甲子園」）で県代表校が計4回優勝している。〈琉球ゴールデンキングス〉の代表取締役社長によれば、沖縄県は「甲子園に出場した地元のチームを熱狂的に応援する土地柄もいい」とした上で、「プロスポーツ球団を運営するには、ある程度の都市規模があった方がセールス面では有利になるケースが多いけれど、熱狂さを加味した場合、沖縄には他の都市にはない良さがある」（木村，2009, p.47）という。

Ⅲ 《FC琉球》の活動の展開

本章では、試合会場、練習場、支援者、運営組織の4点に着目しながら《FC琉球》の活動の展開を検討する。

1. 「ホーム」の確立

沖縄県内には、椅子席、電光掲示板、照明設備等についてJリーグの基準を満たす競技場が存在しない。《FC琉球》にとってそれはJリーグ入会を実現するための最大の課題であった。2008年に《FC琉球》が初めて準加盟を申請した際は、競技場の未整備を理由に不認可とされた。

そこで2010年8月に、地元経済界の有志、サポーター団体の琉球グラナス、沖縄県サッカー協会が「沖縄初のJリーグチームを誕生させる会」（以下、「誕生させる会」）を設立し、Jリーグ規格に最も適合しており、沖縄県が所管する沖縄県陸の早期改修に向けた活動を開始した。この会は1か月間で16万4,856人分の署名を集め、それを陳情書と共に沖縄県知事に提出した。同会の会長によれば、競技場の問題は行政が支援しなければならない事項であるため、《FC琉球》という一企業のためではなく、沖縄県のためという理由で改修工事をするべきであり、そのことを第三者が主張する必要があったという。

署名提出後の2011年1月、《FC琉球》は2度目の準加盟申請を行った。しかしJリーグは、沖縄県陸改修工事の具体的計画が明らかでないと判断し、継続審議とした。これを受けて沖縄県は、2012年7月、2015年度までに沖縄県陸をJリーグ規格に改修することを発表した。改修には「沖縄振興一括交付金」が費やされ、観客席と照明塔が増設され、電光掲示板が新設されることとなった。ただし、改修後の沖縄県陸は椅子席が約1万席であり、1万5千席を必要とするJ1の基準を満たすことができないため、J2規格の競技場として整備されることとなる⁵⁾。また、この動きとは別に、2013年2月には那覇市が、市内に立地する奥武山公園陸上競技場をJ1規格の2万人収容のサッカー専用スタジアムに建て替える方針を表明した。

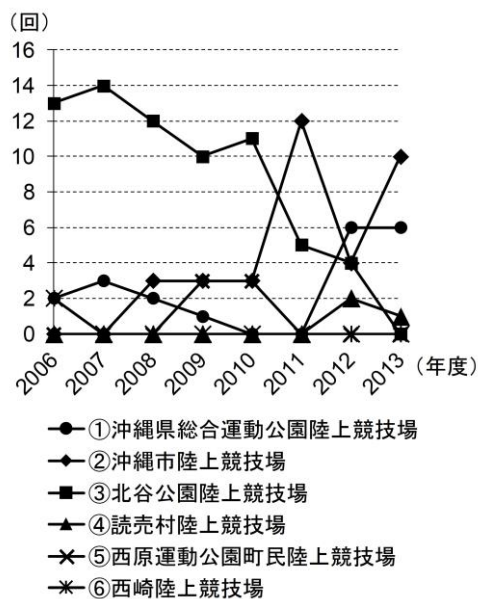
一方、《FC琉球》は競技場の確保と並行して、2010年11月、沖縄県と沖縄市に対してホームタウン化を要請した。沖縄市を選定した理由は、上述の署名によって市内に立地する沖縄県陸がJリーグ規格になる可能性が高まったためである。それを受けて沖縄県と沖縄市は2011年1月、共にホームタウン化を表明した。沖縄県が共同で表明したのは、沖縄市単独では《FC琉球》を支援し切れない可能性が考慮されたためであるという。結果として《FC琉球》のホームタウンは「沖縄市を中心とする全県」として設定された。そして、2013年の準加盟承認に伴い、Jリーグから正式にホームタウンとして認定された。

沖縄市は、1996年に策定した「スポーツコンベンションシティ宣言」でスポーツ交流を通じたまちづくりを謳っており、それが《FC琉球》からの要請の受け入れに繋がった。また、県内外からの集客による経済効果を期待したことも要請を受け入れた理由の一つである。経済文化部文化観光課が《FC琉球》関連事業を担当していることから、市の経済面での期待の高さを窺い知れる。元々、沖縄市はプロ野球チーム〈広島東洋カープ〉のキャンプ地としての長い歴史⁶⁾を背景に、プロ・アマチュアスポーツチームのキャンプや合宿を積極的に受け入れてきた。2012年10月には「スポーツコンベンション推進連絡協議会」が発足し、沖縄市体育協会、沖縄市観光協会、沖縄商工会議所、沖縄市観光ホテル旅館事業組合が参加している。

沖縄市役所担当者によれば、ホームタウン表明以前は沖縄市と《FC琉球》との関わりはほとんどなかったという。しかし現在の沖縄市はスポーツ政策を観光と結びつける傾向にあり、《FC琉球》に対してスポーツ・ツーリズムによる経済効果を期待していると考えられる。

それは沖縄県についても同様である。県は、2010年3月に発表した「沖縄21世紀ビジョン」において、プロからアマチュアに至るまでのスポーツ大会の開催、またはキャンプや合宿の誘致を促進するとともに、スポーツを活用した関連ビジネスを創出するという構想を掲げた。また2010年度からは、「スポーツ・ツーリズム戦略推進事業」を立ち上げ、スポーツを通じた観光誘客を図っている。さらに2011年4月には、「文化観光スポーツ部」を発足させ、スポーツ政策と観光政策との連動がより重視されるようになった。2013年3月に策定された「沖縄県スポーツ推進計画」では、三つのプロスポーツチーム（《FC琉球》、〈琉球ゴールデンキングス〉、〈琉球コラソン〉）の活躍が沖縄県の知名度向上や観光振興に繋がるとされ、それに関する施策を展開していくと述べられている。沖縄県庁における《FC琉球》担当部局は文化観光スポーツ部であり、やはり観光政策の一部に当該クラブの活動が位置づけられている。

内海（2007）によれば、スポーツには「するスポーツ」と「観るスポーツ」という二つの側面がある。アマチュアスポーツは、スポーツそれ自体を楽しむことを意図する。それに対して、プロスポーツの意義は、スポーツを観せることによって生活の糧を得ることである。プロスポーツは、高度な技術を持つプロ選手、興行を組む興行師、スポーツを観ること



第4図 《FC琉球》の試合会場の変遷

注) JFL オフィシャル Web サイト (<http://www.jfl.or.jp/jfl-pc/view/s.php?a=1>) を基に筆者作成。

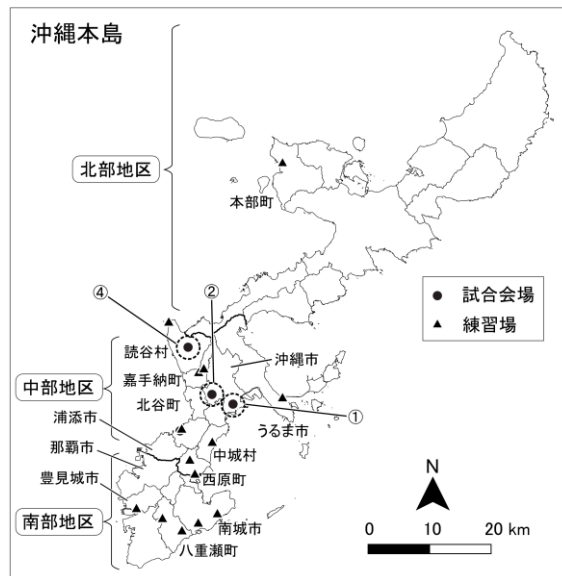
を楽しむ観客、競技を支援するスポンサー企業、選手たちのプレーや競技場の様子を報道・放映するマスメディア等の存在によって成立する。《FC琉球》を観光政策の中に位置づける沖縄県と沖縄市は、「するスポーツ」よりも「観るスポーツ」を重視していると考えられる。

こうした状況でホームタウンとホームスタジアムが設定される中、《FC琉球》の試合会場は次第に沖縄市へと集中していった(第3・4図)。2010年度までは主に北谷公園陸上競技場で試合が行われていたが、2011年のホームタウン表明以降、主に沖縄県陸上競技場や沖縄市陸上競技場といった沖縄市内の施設で開催されるようになった。2013年度は、JFLに参入した2006年度以降初めて北谷町で試合が開催されなかった。

2. 各地を転々

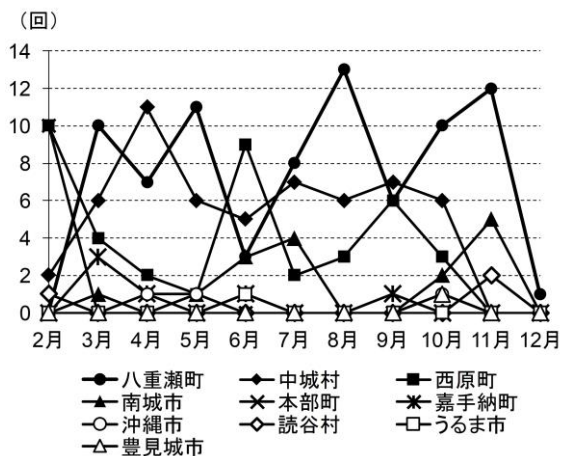
《FC琉球》は発足当初、練習場を安定的に確保できず、沖縄県内を転々としながら練習していた。しかし、練習場が多様化した状態では、選手に負担が強いられる(沖縄県サッカー協会担当者談)。

そこで、JFL参入から3年目の2008年に八重瀬町と交渉し、芝の管理費や施設の整備費、光熱費等を《FC琉球》が負担する代わりに使用料が免除されるという条件で、町内に立地する東風平運動公園サッカー場を優先的に使用できるという契約を結んだ。



第5図 2013年度における《FC琉球》の試合会場と練習場の分布

注) 図中の丸数字は第4図と対応している。《FC琉球》公式サイト(<http://fcryukyu.com/>)を基に筆者作成。



第6図 2013年2月以降の《FC琉球》の練習場

注) 《FC琉球》公式サイト(<http://fcryukyu.com/>)を基に筆者作成。

しかし、契約期限の2013年1月に町が契約解除を決定した。町役場の《FC琉球》担当部局である社会体育課担当者によれば、《FC琉球》の優先使用が八重瀬町にプラスの効果をもたらさなかったことが理由であるという。実際、町民から「東風平運動公園サッカー場を解放してほしい」との要望があり、練習の見学者も少なかった。また、八重瀬町が《FC琉球》に対して町の要望を伝えていないなど、両者の間で十分なコミュニケーションが取られていなかったという。契約締結当初は、東風平運動公園内に立地する陸上競技場を改修し、八重瀬町をホームタウンにしようという《FC琉球》の構想もあるほどだった。



第7図 沖縄市による《FC琉球》の支援活動

注) aは沖縄市役所入口正面の応援幕, bはライカム交差点のPR塔(2013年1月10日筆者撮影)。

たというが、契約解除時は連携が希薄になっていた。《FC琉球》担当部局が社会体育課であることを踏まえると、八重瀬町は、観光重視の沖縄県・沖縄市とは異なり、町民の「するスポーツ」を重視したと考えられる。沖縄市は試合会場となる沖縄県陸があるため、ある程度の集客を見込めるが、八重瀬町の施設は練習場として利用されているため、「観るスポーツ」としての効果が見込めなかったのだろう。

こうして《FC琉球》は、再び沖縄県各地を転々としながら練習することになった(第5・6図)。沖縄県内には、石垣市と宮古島市の離島を含め、いくつかの陸上競技場やサッカー場が立地している(第3図)。しかし、2013年度における《FC琉球》の試合会場と練習場は、沖縄本島の中南部に集中している(第5図)。北部においては、本部町に立地する本部町陸上競技場をキャンプで使用した。また離島では、サッカー教室等の活動は行われているが、試合や練習は実施されていない。

3. 支援する道理の同一化

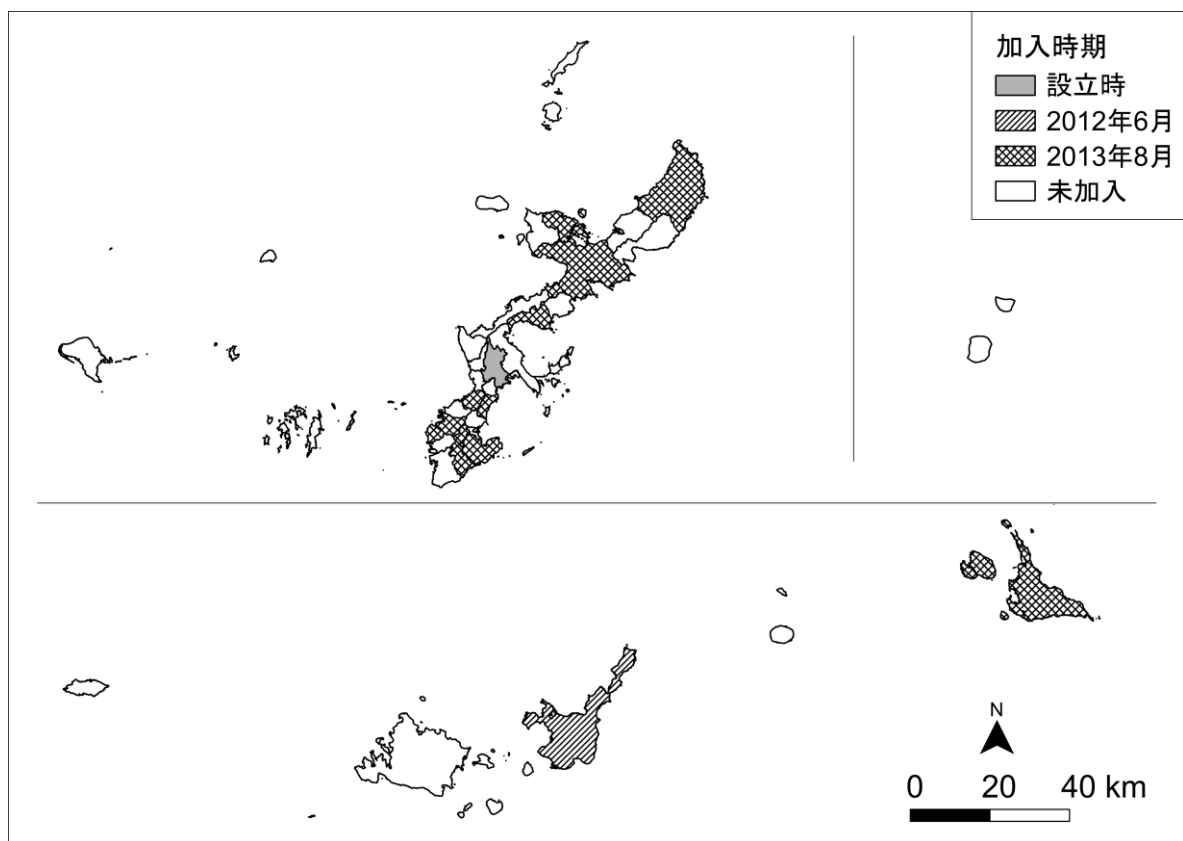
《FC琉球》は2度目の準加盟申請において、競技場の確保と併せ、「地元と連携した支援体制の確立」も改善課題としてJリーグから指摘された。

沖縄市は、ホームタウンを表明した2010年度から《FC琉球》の関連事業や委託事業を予算に計上し、支援活動を行っている。たとえば、《FC琉球》の応援旗や垂れ幕等を作成して、街中や試合会場等での取り付けを行った。第7図のaのように、沖縄市役所入口正面にある窓ガラスには、エイサーと〈広島東洋カープ〉の幕とともに、《FC琉球》の幕が貼られている。また、沖縄市の南の玄関口である「ライカム交差点」には、PR塔に《FC琉球》の幕が設置

され、沖縄市がホームタウンであることが広告されている(第7図のb)。さらに、沖縄市内に立地する全小学校でのサッカー教室のほか、健康教室、「オキナワスポーツフェスタ」などを《FC琉球》に委託し、市民と選手との交流や市民スポーツの促進につながる事業を立ち上げた。ただし沖縄市役所担当者によれば、こうした活動による《FC琉球》の試合観客数や沖縄市観光業への効果はほとんどないという。

沖縄県陸改修の実現において重要な役割を担った「誕生させる会」は、同会の会長によれば、当初の目的を達成したため、今後は後援会として発展的に解消していく可能性があるという。むしろ、活動支援という点において重要な役割を担っているのは「FC琉球支援連絡協議会」(以下、協議会)である。2011年12月、沖縄県が中心となり、沖縄市、沖縄県サッカー協会、「誕生させる会」が参加する形で協議会が設立された。会長は、沖縄県庁の文化観光スポーツ部部長を務めている。協議会の目的は全県をあげて《FC琉球》を支援していく体制を作ることであり、応援に関することやホームゲーム開催の支援に関することなどが話し合われる。また、2012年度と2013年度には「全島サッカー1万人祭り」を開催し、観客数の増加を図った⁷⁾。

協議会は会員を増やしながら規模を拡大している。2012年6月には、石垣市、沖縄観光コンベンションビューロー、那覇商工会議所青年部、沖縄商工会議所、沖縄青年会議所、「沖縄観光未来を考える会」が加入した。そして、2013年8月には、12市町村(那覇市、宜野湾市、宮古島市、名護市、南城市、金武町、八重瀬町、南風原町、国頭村、今帰仁村、中城村、栗国村)、県内マスコミ9社(沖縄タイムス、琉球新報、NHK沖縄、琉球放送、琉球朝日放送、沖縄



第8図 《FC琉球》支援連絡協議会の会員自治体の分布
注) 沖縄県庁への聞き取りに基づき筆者作成。

テレビ、沖縄ケーブルネットワーク、ラジオ沖縄、FM 那覇)、県市長会、県町村会の計 23 団体が新たに加入した。この時期は《FC 琉球》の3度目の準加盟申請の審査時期であり、J3 加盟が現実味を帯びていたため、それに影響されて加入団体が増えたと考えられる。沖縄県庁担当者は会員をさらに拡大していきたいと語る。

第8図は協議会に参加する市町村の分布を示している。特筆すべきは、沖縄市に隣接するすべての自治体が協議会に加入していないということである。その中には、《FC 琉球》がホームタウンを設定する以前に主な試合開催地であった北谷町も含まれる。沖縄市役所担当者は「近隣市町村から支援体制を拡大していきたい」と語るが、実態はそれとは異なる。沖縄県全域を範囲として支援体制が構築されている一方、各市町村の支援方針には温度差があり、ホームタウンの中心であるはずの沖縄市を主軸とした自治体間の連携が取られていない。

たとえば糸満市は、以前まで《FC 琉球》と密接な関係があったにもかかわらず、協議会に加入していない。JFL に昇格した 2006 年、《FC 琉球》の当時の

代表は糸満市に対し、当該地域を活動拠点にするとの意向を示した。また、糸満青年会議所も《FC 琉球》の活動拠点の誘致を市に要請した。それらを受けた当時の市長は、《FC 琉球》の誘致を発表した。そして同年、市内に立地する西崎陸上競技場で《FC 琉球》の公式戦が2試合開催された(第4図)。しかしそれ以降、市と《FC 琉球》の関係は希薄になっていく。2009 年、「糸満市にサッカースタジアムを誘致する市民の会」が、サッカースタジアムの建設を市に要請したものの、2008 年に就任した新市長はそれを受け入れなかった。プロスポーツで使用されるような大型の施設の整備よりも、アマチュアスポーツや市民スポーツの振興につながる環境の整備に努めるという方針があったためである。たとえば、西崎運動公園周辺にはウォーキングコースが整備された。当時の糸満市の場合、「観るスポーツ」ではなく「するスポーツ」に関わる政策が重視されたのである。

では、どのようにして協議会は支援体制を拡大しているのだろうか。元々沖縄県は、高校野球のような「するスポーツ」としてのアマチュアスポーツが盛んな地域である。加えて、米軍基地が所在するた

第2表 美ら島サッカーキャンプの実施自治体およびチーム

市町村	協議会 への加入	プロ野球キャンプの実施	2011年	2012年	2013年	2014年
国頭村	○	○ (2軍)	《釜山アイパーク》 [韓国リーグ]	《FC東京》 [J1, 東京都]	《FC東京》	《FC東京》
石垣市	○	○ (1軍)	《ジェフユナイテッド千葉》☆ [J2, 千葉県市原市・千葉市]	《ジェフユナイテッド千葉》☆ 《ガンバ大阪》 [J1, 大阪府吹田市・茨木市・高槻市・豊中市]	《ジェフユナイテッド千葉》☆	
本部町	×	×	《サンフレッチェ広島》 [J1, 広島県広島市] 《U-15 日本代表》 《大連実徳》☆ [中国リーグ]	《サンフレッチェ広島》		《済州ユナイテッド》
西原町	×	×	《ジェフユナイテッド千葉》☆ 《済州ユナイテッド》 [韓国リーグ] 《大連実徳》☆ 《横浜 FC》	《ジェフユナイテッド千葉》☆ 《水原三星ブルーウィングス》 [韓国リーグ]		
宮古島市	○	○ (1軍)	《横浜 FC》 [J2, 神奈川県横浜市の]		《横浜 FC》	
うるま市	×	○ (韓国チーム)	《フジャアノ岡山》 [J2, 岡山県岡山市・倉敷市・津山市を中心とする全県]			
読谷村	×	○ (2軍)		《サガン鳥栖》 [J1, 佐賀県鳥栖市] 《INAC 神戸レオネッサ》 [日本女子リーグ] 《慶應義塾体育会サッカー部》 [関東大学女子リーグ]	《サガン鳥栖》 《ジェフユナイテッド千葉》☆	
中城村	○	×		《済州ユナイテッド》 《シアトルレイン》 [米国女子リーグ]	《済州ユナイテッド》 《横浜 FC》	
南城市	○	×		《深川紅龍》 [中国リーグ]	《ジェフユナイテッド千葉》☆ 《INAC 神戸レオネッサ》 《ブラウブリッツ秋田》☆ 《慶應義塾体育会サッカー部女子》 [関東大学女子リーグ]	《済州ユナイテッド千葉》☆ 《INAC 神戸レオネッサ》 《ブラウブリッツ秋田》☆ [J3, 秋田県秋田市・由利本荘市・にかほ市・男鹿市を中心とする全県]
北谷町	×	○ (1軍)		《スカイブルー》 [米国女子リーグ]		
八重瀬町	○	○ (韓国チーム)				《セレッソ大阪》☆ [J1, 大阪府大阪市] 《ヴィッセル神戸》 [J1, 兵庫県神戸市] 《ブラウブリッツ秋田》☆
沖縄市	○	○ (1軍)				《セレッソ大阪》☆
金武町	○	○ (1軍, 韓国チーム)				《コンサドーレ札幌》 [J2, 北海道札幌市]
チーム数		9	8	11	8	11

注) [] は各年時点の所属リーグと J クラブのホームタウン, ☆は二つの自治体でキャンプを実施したチーム, 網掛けは国外チームをそれぞれ示している. 『サッカーキャンプ誘致及び冬季サッカーリーグ開催事業報告書』を基に筆者作成.

め、アメリカ文化の影響を受け、野球やバスケットボールの人気の高い（《FC 琉球》、誕生させる会、沖縄県サッカー協会担当者談）。そうした中で《FC 琉球》は、プロスポーツチーム、特にプロサッカーチームによる「観るスポーツ」の支持を得なければならない。《FC 琉球》担当者によれば、当初、沖縄県内で当該クラブの存在意義があまり理解されなかったが、次第に行政や観光協会が観光と連動させる形で理解を示すようになったという。その背景には、観光・リゾート産業を基盤とする沖縄県の経済状況がある。そこで《FC 琉球》は、沖縄県にプロサッカーチームが存在する意義を、県の観光業との関連で位置づけることで、Jリーグ入会のための支援体制を確立してきた。

たとえば、沖縄県が《FC 琉球》への委託事業として 2010 年度から実施している「美ら島サッカーキャンプ」がある。これは、サッカーキャンプの誘致と冬季サッカーリーグの開催を目的としており、スポーツ・ツーリズムの誘発を目指している。この事業において《FC 琉球》は、主に招致活動などを行い、キャンプ期間中は練習試合を開催する。その中には、Jリーグのクラブだけではなく、女子のプロチームや韓国・中国のチーム等も含まれる（第2表）。協議会の会員である 14 市町村のうち、8 市町村が美ら島サッカーキャンプ事業におけるキャンプ地となっており、当該事業は《FC 琉球》と他の市町村との関係構築の場となり、支援の獲得に繋がっている。

4. 内へ外へ

《FC 琉球》は準加盟が承認されるまでに運営法人を 2 回移管している。まず、A 氏⁸⁾を代表とする株式会社琉球スポーツキングダム（以下、RSK）を運営法人として設立された。その後、2007 年に B 氏を代表とする株式会社沖縄ドリームファクトリー（以下、ODF）と業務契約を結んだ。A 氏と B 氏は共に沖縄県外出身であり、県内に移住してそれぞれの会社を運営していた。しかし、2009 年に RSK が経営難に陥ったことにより、ODF に営業権が譲渡された。

《FC 琉球》は超過債務を抱えていたが、B 氏は自身が沖縄県外で運営している別会社の資金を充てることでそれを解消した。B 氏はその後も個人的な財力を基に経営を続けた。

しかし、《FC 琉球》担当者によれば、そのような経営体制は Jリーグの入会条件である「簡単に倒産しにくい構造」ではないと Jリーグから指導が入った。そこで《FC 琉球》は、2013 年に 3 度目の準

加盟申請を行った際、琉球フットボールクラブ株式会社（以下、RFC）を新たに設立し、ODF から営業権を移した。これによって B 氏は、《FC 琉球》の経営に直接的に携わらなくなり、経済的な支援も行わなくなった。その際に B 氏は記者会見において、「私のような県外の人間ではなく、沖縄の人が本気でやるしかないと思います」と発言している⁹⁾。

そこで RFC の代表には、ODF の代表取締役社長だった沖縄県内出身の C 氏が就任した¹⁰⁾。また、沖縄県サッカー協会の副会長、地元企業の社長、那覇商工会議所青年部に所属する税理士法人の所長の計 3 名がそれぞれ競技面、経営面、財務面での指導役を担う形で取締役に就任した（《FC 琉球》担当者談）。さらに、監査役には県内の司法書士が就任した。

《FC 琉球》は、以前からホームタウンである沖縄県と沖縄市に対して財政的支援を依頼してきたが、税金を一企業に費やすには県民の理解が必要であるとの理由で受け入れられなかった。しかし沖縄県は、J3 参入に向けた《FC 琉球》の準加盟申請とそれに伴う RFC の設立を機に、「観光宣伝誘致強化費」という名目で出資を決定し、3 千万円を計上した。沖縄県庁担当者によれば、《FC 琉球》の経営体制が新しくなり、負債がなくなったことが出資決定の理由であるという。またそれは、《FC 琉球》の財政安定化だけが目的ではなく、「県が出資した」という形で信用性を担保することでスポンサー企業を増やすためでもあるという。なお、沖縄市は《FC 琉球》に出資を行っていない。

経営を安定化するためには民間企業による広告料収入も重要である。2013 年度の《FC 琉球》のスポンサー企業数は 114 社であり、そのうち 97 社が沖縄県内企業、16 社が県外の国内企業、1 社が国外企業である。《FC 琉球》は基本的に県内企業を相手にスポンサー交渉を行ってきた。《FC 琉球》担当者によれば、県内にスポンサー企業を増やし、長く支援してもらうことを目指している。クラブ発足当初は、選手たちも県内企業を相手に営業活動をしていたという。

沖縄県が 2011 年に《FC 琉球》の試合会場（沖縄市陸上競技場）で来場者を対象に実施したアンケート調査によれば、回答者 353 人のうち 287 人が県内在住者であり、市町村別に見ると、那覇市在住者（80 人）が最も多く、ホームスタジアムがある沖縄市在住者（47 人）を 1.7 倍上回っている。県庁所在地である那覇市の人口は約 32 万人であり、県内で最も人口が多い自治体である。また、総務省統計局の



第9図 那覇市に立地する《FC琉球》事務局

注) aは事務局外観, bはオフィシャルショップ「蹴人」(2013年1月14日筆者撮影)。

『2012年度経済センサス』によれば, 約17,000件の事業所が立地しており, 県経済の中心地である。沖縄市の人口が約13万人で, 事業所数が約5,500件であることを踏まえると, 《FC琉球》の経営基盤是那覇市にあるのかもしれない。

RFCの本社は沖縄市に立地しているが, 那覇市にも《FC琉球》の事務局が設置されている(第9図のa)。事務局内には, オフィシャルショップ「蹴人」も併設されている(第9図のb)。沖縄市役所や沖縄市観光協会は, ホームタウンである沖縄市への事務局の移転を《FC琉球》に要請している。

ただし, 県内に立地する上場企業は5社であり, 売上高が大きい企業も限られている。そこで, 《FC琉球》は県外企業に対してもスポンサー交渉を行っている。2013年2月にはタイのユニフォーム製造業者ともスポンサー契約を結んだ。《FC琉球》担当者によれば, 他のスポンサー企業の中には, マレーシアに事業を展開している企業があり, マレーシア人選手の獲得を支援するという話もあったという。さらに2012年7月, Jリーグアジアアンバサダー¹¹⁾と連携してマレーシアU-23代表選手2人を練習に参加させ, 2013年3月に両選手を獲得した。それにより《FC琉球》のFacebookにマレーシアからのアクセスが増え¹²⁾, 両選手のデビュー戦ではマレーシアメディア9社が沖縄県を訪問した。その後, 2013年12月にはマレーシア遠征を行い, マレーシアU-23代表との親善試合を開催した。この試合はマレーシア国内でテレビ中継されたため, 放映権料等の経済的な効果が大きかった。また, マレーシアに進出している日本企業や現地の企業が協賛していたため, 国外でのスポンサー交渉の可能性も開けた。《FC琉球》担当者によれば, 今後もマレーシアサッカー協

会との良好な関係を構築していく方針であるという。

このような《FC琉球》の東南アジアへの進出は, Jリーグの動向に沿うものである。Jリーグは2012年1月に「アジア戦略室」を設立し, 東南アジアへの市場拡大を図っている。これは, Jリーグの平均観客数が最多時の3分の2に減少し, 2012年度には13年ぶりの赤字に陥ったことを背景としている¹³⁾。Jリーグは放映権料の獲得等を目的とし, 各クラブには東南アジア人選手の獲得を提案している¹⁴⁾。

IV 《FC琉球》にとっての「地域」とは

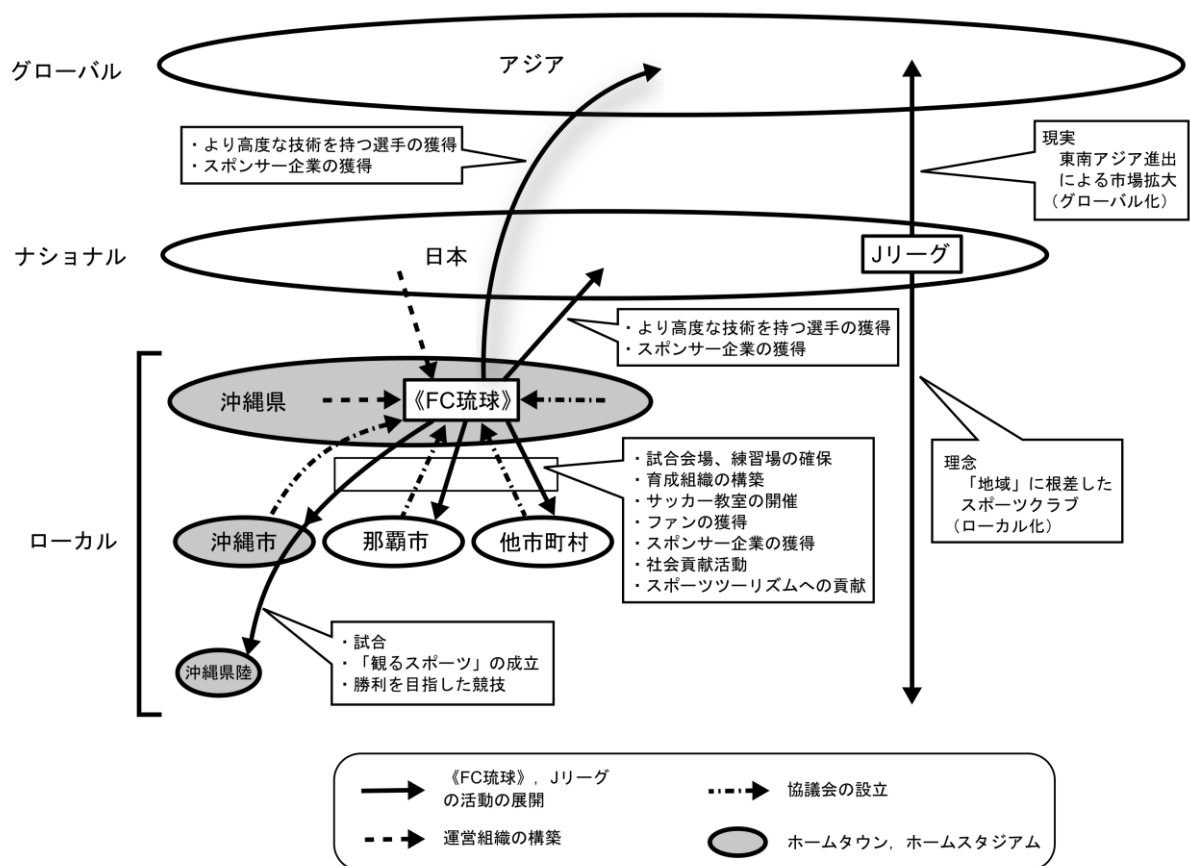
《FC琉球》のJリーグ入会を目指した活動は, クラブ・行政・企業・地元住民等の多様な主体によってマルチスケールで展開されてきた。それは第10図のようにまとめられる。彼らの一連の活動を特定の行政区域に収めることはできない。

では, このように活動する《FC琉球》を観客たちはどのように捉えているのだろうか。内海(2007)が述べるように, プロスポーツは「観るスポーツ」であり, 観客が存在して初めて成立する。本章では, サポーターへの聞き取りと試合会場内の観察調査の結果を基に, 観客の意識や態度を検討する。

なお, 以下の発言・会話文の丸括弧部分はすべて筆者による補足である。また, サポーターの属性(第3表)はすべて2013年時点のものである。

1. ホームタウン「沖縄県」

《FC琉球》のホームタウンは「沖縄市を中心とする全県」であるが, そのことに関してサポーターはどのような考えを抱いているだろうか。まず, D氏とE氏は以下のように語る。



第10図 《FC琉球》の活動の展開

第3表 聞き取り対象の《FC琉球》サポーターの属性

名前	性別	年齢(歳)	出身地	居住地
D	男	38	読谷村	那覇市
E	男	29	浦添市	那覇市
F	男	不明	不明	不明
G	男	40	千葉県	那覇市
H	男	40	兵庫県	那覇市
I	男	31	那覇市	那覇市
J	男	36	宜野湾市	宜野湾市
K	男	42	北谷町	北谷町
L	男	39	沖縄市	沖縄市
M	男	49	宮古島市	那覇市
N	男	41	宜野湾市	南城市
O	男	22	糸満市	糸満市
P	男	51	那覇市	那覇市
Q	男	47	埼玉県	那覇市
R	男	52	沖縄市	沖縄市

やっぱり、沖縄のチームだし、頑張ってもらいたい。まあ、僕、本当はもう野球大好きなんですけど、でもやっぱり、まず沖縄の場合、自分のような人は多いと思うんです。沖縄って地域で頑張ってるんだっていうところから、バスケであれ、ハンドボールであれ、サッカーであれ、応援し始める人って多いと思ってる

んです。自分もその一人です。(中略)サッカーが大好きっていうよりも、沖縄で頑張っているチームを応援したい。

[発言1: D氏]

サポーターのつながり、知っている人が多いから。まあ、沖縄のチームなんで。コラソン、ハンドボール応援しようが、あるいはサッカー応援しようが、バスケ応援しようが、一緒かなと思うんで。オール沖縄ですよ。

[発言2: E氏]

これらの発言における「沖縄」は、沖縄市ではなく沖縄県を指している。またE氏は、スポーツの種類に関係なく「沖縄県のチーム」であることが重要であるとしている。

沖縄県においては《FC琉球》の試合だけが、特定の競技場で定期的に行われる「観るサッカー」として成立している。そのため、熱狂的なサポーターであるF氏は次のように語る。

(沖縄県では)ここ(《FC琉球》)しかチームを選べない。横浜のチームを応援したって、それは、自分は応援しているとは思えない。一ファンになっちゃいま

すから。(中略) まあ、スタジアムで死ねればいいと思ってるんで。

[発言3:F氏]

沖縄県外から県内に移住したG氏、H氏は、自身の居住地と関連づけながら《FC琉球》を応援する理由を述べる。

筆者:《FC琉球》に関わるようになったのは(なぜですか)。

G氏:だって、俺らは沖縄に住んでるから。

H氏:簡単に言うたら、こっちに住んでるからやな。

[会話1:筆者、G氏、H氏]

両氏とも《FC琉球》を「沖縄県」のチームと捉えている。またG氏は県内に移住する以前、J1の《鹿島アントラーズ》のサポーターであり、関東で開催されるJリーグの試合を頻繁に観戦していたという。沖縄県に移住してからサッカーを観戦したいと思っていたところ、《FC琉球》の存在を知った。その頃の《FC琉球》はJFLに所属しており、Jリーグの試合をよく知るG氏にとって試合内容は決して満足いくものではなかった。しかし、沖縄県における「観るサッカー」は《FC琉球》の試合だけである。そのため、G氏は以下のように語る。

こっちに来たらサッカーがないじゃん。(中略) こっちに来たらさ、サッカーから急に遮断される。(中略) こっちで、じゃあサッカーどうしようかっていったときに、たまたま、夕方のニュースにトルシエ¹⁵⁾が、で、初めてトルシエが来るときの、2008年の北谷での開幕戦に行ったの。そしたら、7千人ぐらいいて。あれでさ、すげえ沖縄、サッカー盛り上がってんだって。知らなかったもん。それで、初めて《FC琉球》知った。

[発言4:G氏]

このように、サポーターにとっての《FC琉球》は「沖縄県」という「地域」と密接に結びついている。それはホームスタジアムの移転をめぐるサポーターの発言にも表れている。《FC琉球》の主な試合会場が、北谷町から沖縄市に移ったことに関するI氏、J氏、K氏の発言を見てみよう。

(ホームスタジアムの移転は)全然何も問題ない。沖縄県って、変な話、みんな車持ってるから、そのへんは多分気にはしないと思う。北谷から沖縄市ぐらいの距離ぐらいいったら、そこまでは、そんな変わらない。

[発言5:I氏]

個人的に北谷が好きなのは、雰囲気が大好きなだけ。

(中略) 雰囲気とかJリーグとしての発展性考えると、沖縄市よりもはるかに北谷のほうが絶対魅力はあるわけ。なぜならば、近くにいわゆる商業施設があり、近くにビーチがあるわけ。いわゆるThe沖縄って世界があるわけよ。で、そこ(沖縄県陸)に、何があるかっていうと駐車場がある。

[発言6:J氏]

(試合会場が沖縄市に移ったとき、《FC琉球》が離れた感じは)全然(しなかった)。北谷町そのものがホームタウン宣言してくれたわけでもないですし。《FC琉球》から一方的に、あの、なんだろう、アプローチあったのにもかかわらず。(中略)(沖縄市のホームタウン宣言は)本当に評価しますし、俺はむしろありがたい。

[発言7:K氏]

筆者が聞き取りをした限り、サポーターはホームスタジアムの県内移転について特段大きな不満は抱いていない。ただし、I氏やJ氏のように、交通アクセスの利便性向上、設備の充実化、良い雰囲気作りを求める声は他にもある。

(ホームスタジアムが沖縄市にあることは)いいと思いますよ。でもやっぱり交通の便が…(中略)(那覇市に競技場を建設するのが)一番いいと思う。那覇市はベストな場所だと思う。

[発言8:E氏]

いわゆるヨーロッパ型のサッカークラブを作るんだったら、(ホームスタジアムの建設は)北谷。北谷か、奥武山。なぜなら、奥武山は基本的に、モノレールが通ってるし、空港が近いから。(中略)沖縄市に対して不満があるのは、いわゆる一般的な球技場、陸上競技場だから。何の魅力もないから。ただそれだけで。

[発言9:J氏]

これらに加えて、人口が多い那覇市に隣接する豊見城市豊崎の空き地に、サッカー専用スタジアムを建設するべきだという意見もあった。筆者が主に聞き取りを行ったフットボールカフェ(第11図)が那覇市に立地しており、対象としたサポーターのほとんどが沖縄県南部に居住しているため、こうした発言が多くみられた可能性はある。しかし、沖縄市に居住するL氏による次の発言は重要であろう。

筆者:どちらかというと、あれですか。沖縄市のチームというより、沖縄県全域のチームという感じですか。

L氏:そうです。はい。はい。そうですね。まあ、そうですね。まあ、会場的にどうしても、今は沖縄市のほうから、そのじゃあ是非ホームタウンとして、名乗らせてくださいというお話



第 11 図 《FC 琉球》のサポーターが集まるフットボールカフェ

注) a はカフェ外観, b はカフェの入口に掲げられた《FC 琉球》の旗 (2013 年 1 月 9 日筆者撮影)。

を数年前に頂いて以来、沖縄市をまず基本でやるという話になってます。もちろん、沖縄という、琉球という名前が付いているでしょ。沖縄みんなのチーム。

筆者：スタジアムは別に沖縄市でなくても (いいということですか)。もし会場が、前は北谷でやってましたが、それもどこで開催するようになって、そんな変わらないってことですか。沖縄市でやってほしいみたいなのという思いは…

L 氏：チーム出来てもう 10 年になるんですけど、そんななかで、あっちこっち転々として、いろんなところでお世話になって借りてたなかで、やっぱり沖縄市のほうから自分たちのほうでホームタウンとして一緒にやっていきたいと思いますというお話をいただいた以上、基本沖縄市でやるのがまず筋だと思うんですね。そんななかで、どうしても、後々、どっかが是非じゃあうちのところでもやってほしいと、ハードも用意してやるってなって、どうしても公共的に、もうたとえば沖縄市のキャパではここまでは収まらないとなってしまうようになってるんだったらわかるんですけど、まあ今は基本ここでやるという。まあ沖縄市、県総 (沖縄県陸) がありますんで、ああいうところが今後改修して、来シーズン以降、再来年シーズンかな、使える目途もついているなかで、今のところは沖縄市から動く必要はないのかなという。

[会話 2：筆者、L 氏]

L 氏は、現状は沖縄市からホームスタジアムを移転する必要はないとしながらも、将来的に施設が整備されれば県内移転も認めると語った。それは、「沖縄という、琉球という名前が付いているでしょ。沖縄みんなのチーム」という発言からも読み取れるように、《FC 琉球》が沖縄市ではなく沖縄県という「地域」と密接に結びついているためである。

2. 勝利を求めて

一方で、III 章で見たように、《FC 琉球》の活動はナショナル・グローバルスケールにも展開している。こうした状況をサポーターはどのように捉えているのだろうか。

(東南アジアへの進出は) いいじゃん、全然。だって、Center of the Asia だよ。琉球は。夢があるじゃん。

[発言 10：J 氏]

いいことだと思う。まあ、まだサッカー後進国と言われてるけど、良い選手っていっぱいいるから。変な話、良い選手を安価で雇えるっていうのはいいことだと思うし。また、そんなところと提携できていくっていうのは、やっぱり、沖縄にとってはメリット大きいだろうと思う。沖縄の地理性とか、沖縄に住んでる人の数、あの日本の国民だけじゃないっていう。アメリカだったり韓国だったりとか。(中略) あ、これでも沖縄らしいなって、逆に。

[発言 11：I 氏]

J 氏は、《FC 琉球》がマレーシアをはじめ東南アジアへ進出することは、沖縄県の地理的位置を考慮すると好ましいことである発言した。また、I 氏は、多国籍な状況が沖縄らしさであると考えている。

さらに、経済的側面に着目した見方もある。

M 氏：(マレーシア進出は) 必然でしょ。別に琉球がどうのこうじゃなくて、J リーグがそういう動きだから。

N 氏：マーケティング広げるのもあるし。

M 氏：要は金がないから。マーケットを拡張したい、日本からアジアに向けて。そしたらコンテンツとしては、もう東南アジアしかないわけ。安いし。

第4表 2013年度の《FC琉球》、《琉球ゴールデンキングス》、《琉球コラソン》在籍選手の出身地

出身地	《FC 琉球》	《琉球ゴールデン キングス》	《琉球コラソン》
沖縄県内	7 (22.6)	6 (54.5)	12 (63.2)
沖縄県外	24 (77.4)	5 (45.5)	7 (36.8)
－ 国内	20 (64.5)	1 (9.1)	7 (36.8)
－ 国外	4 (12.9)	4 (36.4)	0 (0.0)
計	31 (100.0)	11 (100.0)	19 (100.0)

注) 括弧は割合 (%). 各クラブ・チームの公式サイトを基に筆者作成.

筆者: そういうことを考えると、沖縄という地理的位置を生かして…

M氏: 沖縄じゃないよ. J3 がそういう実験室になるから、すべてに関して. 琉球がどうのこうじゃないよ.

N氏: 琉球が、選手を獲ったっていうのは別にありではあるし. 使える使えないはあると思うけど. それに対するメディアの露出が沖縄に対して増えるから. 観光もポイントだから.

[会話3: 筆者, M氏, N氏]

M氏とN氏は、《FC琉球》の活動がグローバル化することと沖縄県の地理的特性は関係がなく、それはあくまでもJリーグの意向であると認識している. 彼らは、《FC琉球》が存続するためには沖縄県を越えて活動を展開しなければならないと考えている. それは、《FC琉球》の運営体制やスポンサーについての会話からも読み取れる.

M氏: 地元の会社じゃなきゃいけないとは、一言もJリーグは書いていない.

N氏: そういう意味では、沖縄は勘違いして、沖縄だから沖縄じゃないといけない、いけないと思ってるだけで.

M氏: それ(沖縄にこだわる必要)はない.

N氏: それ言ったら、内地のチームなんでもってのほか.

M氏: じゃあ、京セラ¹⁶⁾は、京都の人しか会社役員になってないかって言ったら、それで終わりじゃない.

(中略)

筆者: サポーターの方々にしてみれば、代表が地元出身であろうが、スポンサーが地元企業だろうが…

N氏: 関係ない関係ない.

(中略)

M氏: 理想論はそれ.

O氏: 理想を言えば、まあ…

M氏: 沖縄の人が全部やってやったほうがそりゃ美しいよ.

[会話4: 筆者, M氏, N氏, O氏]

このようにM氏とN氏は、《FC琉球》を存続させるためであれば、ナショナル・グローバルスケールの活動展開も妥当であると判断している.

競技面で見ても、《FC琉球》はナショナル・グローバルなクラブである. たとえば、2013年度の《FC琉球》在籍選手のうち8割近くが沖縄県外出身者である(第4表). 《FC琉球》担当者によれば、このような選手構成について、「沖縄県出身選手が少ない」と各所から指摘されることがあるという. また、《FC琉球》の選手、職員、サポーター、その他関係者が意見交換する場である「FC琉球の未来を考える会」¹⁷⁾においても、「沖縄県民のチームなら、沖縄の人を使ってほしい」、「沖縄の選手が増えたら応援する」との要望が出たことがある. これらの背景として、所属選手の半数以上が県内出身者である《琉球ゴールデンキングス》と《琉球コラソン》の存在がある(第4表).

しかし、サポーターたちは所属選手に県外出身者が多いことを否定的に捉えていない.

M氏: 沖縄の選手がいないいいっていうけど、沖縄の選手が、そのぐらいのレベル、JFLのレベルに何人いるよって話だから.

N氏: JFL以上のレベルがないからしょうがない. 外でできる選手なら、外でやるべき、レベル高いところでできるなら.

O氏: いつか戻ってきたくなったら、戻ってきて貢献してねぐらい.

[会話5: M氏, N氏, O氏]

J氏: 琉球を名乗ってるのにさ、中身が琉球じゃないわけよ. (中略) これはあなた方には受け入れないだろうけど、バスケと一緒にさ. 純血主義¹⁸⁾じゃないってことよ.

M氏: だから、本当は純血であってほしいんだけど、でもそれって、Jリーグのスタートラインに立つまでは、ある程度人の力を借りなきゃいけない. じゃあ沖縄の人たちだけで、要は変な話、沖縄の人たちって、我慢するの嫌いだし、苦労

第5表 2013年度における沖縄県のプロスポーツチームの試合会場

市町村	《FC琉球》	試合数	《琉球ゴールデンキングス》	試合数	《琉球コラソン》	試合数	計
沖縄市	沖縄市陸上競技場	10	沖縄市体育館	10	沖縄市体育館	2	28
	沖縄県総合運動公園陸上競技場	6					
読谷市	読谷村陸上競技場	1					1
那覇市			那覇市民体育館	8			10
			沖縄県立武道館	2			
宜野湾市			宜野湾市立体育館	4			4
石垣市			石垣市総合体育館	2			2
浦添市					浦添市民体育館	3	3
八重瀬町					東風平運動公園体育館	1	1
計		17		26		6	49

注) 各クラブ・チームの公式サイトを基に筆者作成。

するの大嫌いだから、給料もらえなくてもやりますって、それはないわけ。

J氏：沖縄に才能がある人間がいるのなら、《FC琉球》に来るべきじゃないもん。J1に行くべきだよ。絶対に。

[会話6：J氏，M氏]

自分はサッカーよく観てるからあれなんだけど、練習も観てるからあれなんだけど、要は、使える選手だったら誰だっていい。自分だったら。(中略) 沖縄県民の人からすると、沖縄県の方を使わないといけないうって割には、我那覇¹⁹⁾が来ても観客数は増えないし、県民の人を増やしても結局は来ないってことが分かったから。

[発言12：I氏]

彼らは皆、沖縄県内には《FC琉球》に在籍できるほどのスキルを持つ選手がそれほどいないので、試合に勝つためには県外から選手を獲得しなければならないという認識を持っている。ただし、M氏が「本当は純血であってほしいんだけど」と語るように、県内出身の選手で構成される《FC琉球》がサポーターの理想像なのかもしれない。それについてP氏も、「地元の選手を使いつつ、なおかつ強くなければならない」と述べている。

《FC琉球》は、世界に通用する選手の育成と青少年の健全育成を目的として、下部組織(FC琉球アカデミー)を有している。さらに、沖縄県内各地でサッカースクールを開校している。それについてF氏は以下のように語る。

こいつら(アカデミー・スクールの子供たち)が、上(トップチーム)に上がってくれたら。こういう子たちが、どんどん、チームを支えてくれるクラブになっ

ていってほしいっすね。そのために自分は応援してるので。広いスパンで。

[発言13：F氏]

サポーターだけでなく沖縄県サッカー協会も県内出身選手で構成される《FC琉球》を理想としており、それが地域に根差したクラブであると考えている。

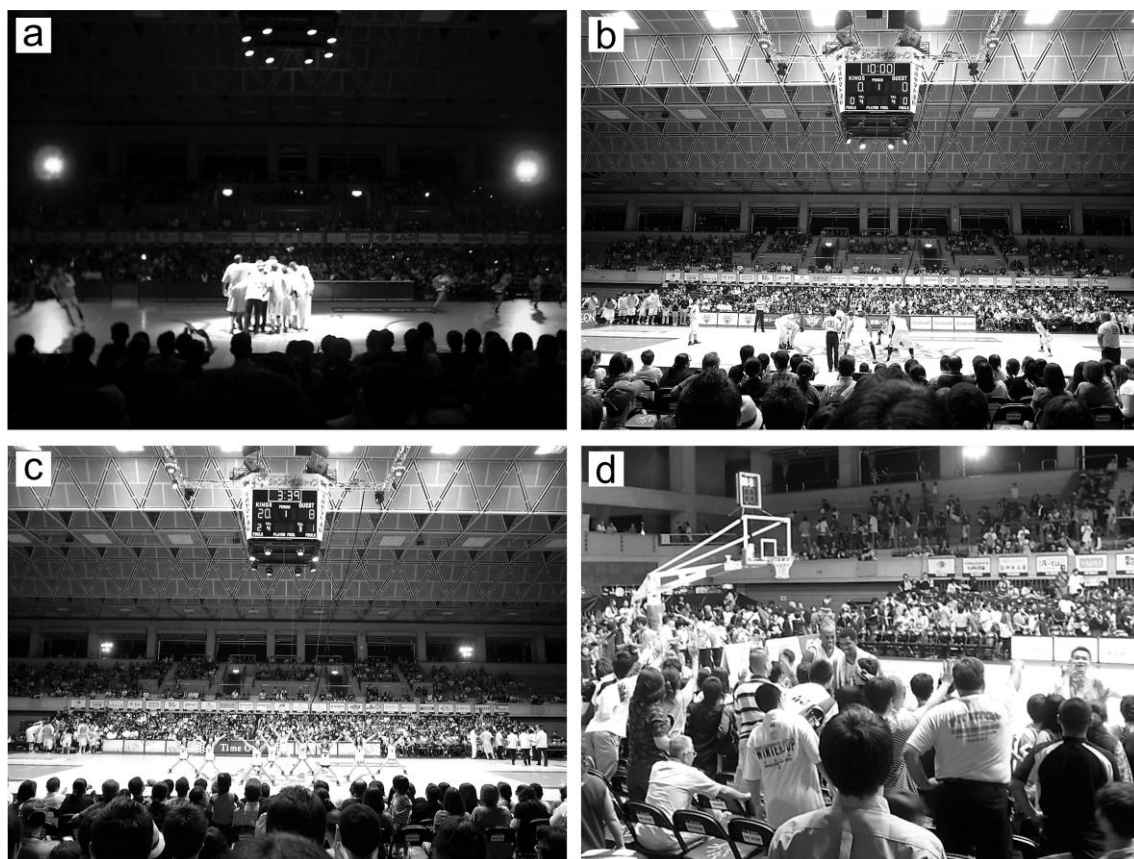
本当に根差すチームを作るんだったら、育成しないといけない。これは、チームの責任だよ。連れてきて、プレーさせてっていう形だから。だから、時間かかるよっていうのはこの辺。根っこを沖縄におろすんだったら、やっぱり、育成ということを片方ではしっかりやっていかないといけない。(中略) 特にさ、大手の企業がないなかで、資本金のない企業がサポートしてるわけでしょ。そうだったらやっぱり、なかなか沖縄では、選手を集めて強いチームを作るのは、無理だから。(中略) チームとして育てた選手がピッチに立っている状況までもっていかないと、一体感、おらがチームということにはなかなかならない。だから時間がかかるよ。

[発言14：沖縄県サッカー協会担当者]

以上のように、《FC琉球》のサポーターは、当該クラブによるナショナル・グローバルな活動展開を支持している。ただし、選手の獲得方法に関しては、県内(ローカールスケール)出身選手で構成されたクラブという「理想」と、強い選手を県外(ナショナル・グローバルスケール)から呼び込まなければ試合に勝てないという「現実」がせめぎ合っている。

3. 90分

《FC琉球》は競技場という場所においてどのような「観るスポーツ」を展開しているのだろうか。《琉



第 12 図 〈琉球ゴールデンキングス〉の試合会場の様子

注) a は選手入場時の演出, b は試合開始時の様子, c はタイムアウト時の演出, d は試合終了時の様子 (2013 年 11 月 2 日 筆者撮影)。

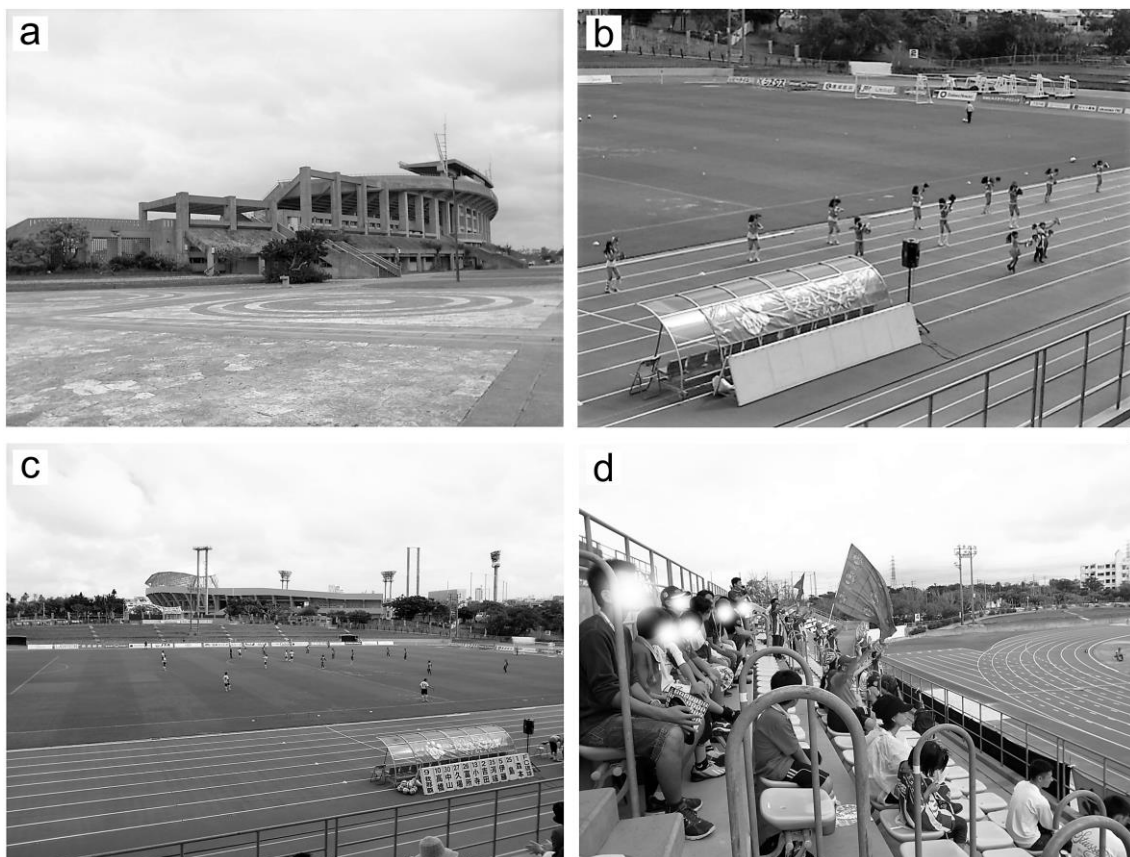
球ゴールデンキングス), 〈琉球コラソン〉と比較しつつ, 《FC 琉球》の試合会場の様子を見ていこう。

第 5 表は 2013 年度における《FC 琉球》, 〈琉球ゴールデンキングス〉, 〈琉球コラソン〉の試合会場を示している。《FC 琉球》とは異なり, 〈琉球ゴールデンキングス〉の試合は, 那覇市を中心にさまざまな自治体で開催されている。2012 年度からは石垣市においても試合が開催されており, 日本最南端でのプロスポーツの公式戦となっている。石垣市には特殊なスコアボードが設置できる施設があり, そこはある程度の集客が見込めるため「観るスポーツ」を成立させられる。

そのような〈琉球ゴールデンキングス〉は試合の魅せ方に高い評価を得ている。筆者は調査中, 現地の住民から何度も「キングスの試合は観戦したのか」と尋ねられた。〈琉球ゴールデンキングス〉の試合会場では, 選手が入場する際に, 照明や沖縄県出身のテクノバンドが作曲した音楽が駆使され, チアリーダーが登場し, ディスクジョッキー (DJ) による煽りがある (第 12 図の a)。会場は観客席からコート

までの距離が近く, 天井からはスコアボードが吊り下げられ, 立体的な空間が作られている (第 12 図の b)。試合中, キングスの攻撃時にはテンポの良い現代的な沖縄音楽にアレンジされた BGM が流れ, 守備時になると観客が「ディフェンス! ディフェンス! ディフェンス!」と声を合わせ, 相手チームのフリースローの際にはブーイングを浴びせる。またタイムアウトの間は, チアリーダーが再び登場し, ダンスを披露する (第 12 図の c)。さらに試合終了後には, 選手がコート一周しながら観客とハイタッチを交わす (第 12 図の d)。

このように, 〈琉球ゴールデンキングス〉の試合会場は, 開場から閉場まで, 観客が非日常的な空間を体験できるように演出されている。単に競技を観てもらおうのではなく, 屋内という利点を生かし, 照明や音響等を用いた魅せる演出が施されている。また, 終始, チームとファンとの一体感を生み, ファンが選手と共に戦っているような気持ちになれる雰囲気を作っている。会場にいたファンは, 沖縄県外の bj リーグの試合会場について, 「しょぼかった」「沖縄



第13図 《FC 琉球》の試合会場と試合時の様子

注) aは沖縄県陸の外観, bは試合開始前の演出, cは試合中のピッチの様子, dは試合中の観客席の様子 (aは2013年1月10日, b, c, dは2013年11月3日にそれぞれ筆者撮影)。

以上にすごいところを観たことがない」と語った。〈琉球ゴールデンキングス〉は、上記のような演出によってスポーツエンターテインメントという新たな娯楽産業を創出したことが評価され、2012年度に沖縄県観光功労賞を受賞している。

では、《FC 琉球》の場合はどうだろうか。M氏によれば、そもそも沖縄県には競技場でサッカーを観る文化がなかったという。先述したG氏の発言4は、それに通じるものである。Q氏も、「まだ、そのサッカーっていう生活がこう文化の中に入り込んできてないんだなって」と語る。沖縄県でプロサッカーに接する機会は、県外の競技場を訪れるか、テレビで観戦するほかになかったのである。《FC 琉球》が発足したことで、初めて当地で本格的な「観るスポーツ」としてのプロサッカーが成立した。

J氏によれば、サポーター団体の琉球グラナスの中には沖縄県外出身者が半分程度いるという。彼らは沖縄県内に移住する以前に「サッカーを観る文化」に接しており、移住後もサッカーを観る場を求めているのである。また《FC 琉球》が発足したことで、

県内の子供たちは、Jリーグで競技経験がある選手のプレーを直接観られるようになった。

そのような《FC 琉球》の本拠地である沖縄県陸は、〈琉球ゴールデンキングス〉の試合会場より大規模である(第13図のa)。空間的な広がりはあるが、屋外であるため照明を使った演出はできない。2013年度は沖縄県陸が改修工事のため使用できず、沖縄市陸上競技場が主な試合会場となったが、会場の様子は両者ともほとんど同じである。まず、チアリーダーによるパフォーマンスがあり(第13図のb)、その後、試合が開始される。ただし、陸上競技用トラックが壁となり、観客席からピッチまでの距離が遠く感じられる(第13図のc)。試合中の観客席は、立って応援歌(通称「チャント」)を歌うサポーターがいる区域(第13図のdの奥側)と、座って試合を観戦するサポーターがいる区域に分かれる(第13図のdの手前側)。筆者が観戦した試合では、観客が一体となって応援するために、座って試合を観戦するサポーターがいる区域にチアリーダーが近寄り、チャントに合わせた手拍子を誘導するという試みが行



第14図 〈琉球コラソン〉の試合会場の様子

注) aは試合開始前の演出, bは試合中の様子, cは観客席の様子, dは試合終了時の様子 (2013年11月4日筆者撮影)。

われた。

[発言15: R氏]

また、屋根が設置されていないため、気象状況が試合観戦に影響を与える。たとえば、筆者が観戦している途中、雨が降ってきたため、一部の観客が客席裏の通路に避難するという出来事があった。さらに、気温が高すぎて昼間に公式戦を開催できなかったこともあるという。しかし、沖縄県には照明設備が十分な競技場がないため、夜間の試合開催は難しい。そうした競技場の設備事情についてR氏は以下のように語る。

だって、経営なので、採算が取れないと、しっかりしたスタジアムができて、そのスタジアムで観ることに価値があるっていうところまでくると、あそこ(那覇市がサッカー専用スタジアム建設を予定している奥武山公園)でやったほうが、チームとしていいかもしれない。(中略)(沖縄市のホームタウン表明により、観客に沖縄市民が増えたかもしれない²⁰⁾が)チームって生き物だし、存続するためにどうするかっていうのをまず一番に考えないといけない。これは、那覇にできたり、他の市町村で良い施設ができるのであれば、もちろん。だから、自分言ってるのはオール沖縄だよって。支えるのは。

ベイル(1997)によれば、競技場は「家 home」のような作用を有している。多くのサッカーファンは、競技場を家のように捉え、自分たちとそれとの間に絆を持っているという。しかし、《FC琉球》が使用する競技場は、まだそのような作用を有していない。経営的観点から考えても、《FC琉球》がプロスポーツチームとして存続するためには、「観るスポーツ」に適した施設を整備する必要があると言える。

もちろん競技場の設備や会場での演出だけが「観るスポーツ」を成立させているわけではない。筆者が観察した〈琉球コラソン〉の試合がそれを示している。〈琉球コラソン〉の試合会場においても、〈琉球ゴールデンキングス〉のような演出は行われる。第14図のaのように、選手入場時には照明と音響が駆使され、チアリーダーによるパフォーマンスがある。DJによる煽りもあり、攻撃時には音楽が流される。また、観客席からコートまでの距離も近く(第14図のb, c)、試合終了後には選手が観客とタッチを交わす(第14図のd)。確かに、〈琉球ゴールデン

第6表 《FC 琉球》ホームゲームにおける観客数の推移

年度	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
順位	14 位	17 位	16 位	16 位	10 位	9 位	9 位	11 位
1	2,843 北谷	4,213 北谷	6,247 北谷	2,476 西原	3,145 北谷	2,565 市陸	2,358 読谷	3,043 市陸
2	3,424 北谷	2,842 北谷	3,389 北谷	1,426 北谷	960 北谷	602 北谷	2,172 県陸	1,017 県陸
3	2,984 北谷	1,153 県陸	2,674 北谷	1,273 西原	1,513 北谷	1,742 市陸	1,823 北谷	1,889 市陸
4	3,524 北谷	2,063 北谷	3,174 北谷	1,452 北谷	1,583 北谷	3,008 市陸	1,322 県陸	1,372 県陸
5	3,714 北谷	4,627 北谷	2,237 県陸	1,125 市陸	424 北谷	1,371 市陸	1,702 県陸	1,364 県陸
6	3,348 北谷	2,428 北谷	2,786 市陸	2,384 北谷	3,344 北谷	2,012 北谷	2,147 北谷	1,839 県陸
7	2,781 北谷	2,362 北谷	2,781 北谷	984 北谷	2,683 西原	3,017 市陸	1,388 北谷	1,138 市陸
8	1,368 北谷	1,726 北谷	1,708 県陸	1,825 北谷	3,698 北谷	1,744 市陸	1,364 市陸	1,374 市陸
9	927 北谷	1,379 北谷	3,104 北谷	1,032 北谷	1,668 北谷	2,141 北谷	1,308 市陸	1,281 読谷
10	3,267 県陸	1,572 県陸	2,049 北谷	781 西原	1,641 北谷	1,852 北谷	1,268 県陸	1,477 市陸
11	2,836 北谷	1,364 北谷	1,826 市陸	1,211 北谷	723 西原	1,336 市陸	11,658 県陸	1,450 県陸
12	3,839 北谷	1,784 北谷	2,231 北谷	1,117 北谷	525 市陸	363 市陸	487 読谷	10,116 県陸
13	2,106 西崎	2,652 北谷	2,238 北谷	813 北谷	3,601 市陸	2,341 市陸	262 北谷	1,406 市陸
14	3,986 県陸	3,478 北谷	3,462 北谷	618 市陸	612 市陸	1,527 北谷	935 県陸	846 市陸
15	3,820 西崎	1,347 北谷	2,278 北谷	824 県陸	617 北谷	1,854 市陸	1,221 市陸	1,351 市陸
16	4,609 北谷	1,874 県陸	2,175 市陸	831 市陸	468 西原	1,208 市陸	3,211 市陸	926 市陸
17	4,837 北谷	4,675 北谷	4,638 北谷	2,747 北谷	3,002 北谷	2,937 市陸	—	3,291 市陸
計	54,213	41,539	48,997	22,919	30,207	31,620	34,626	35,180
1 試合 平均	3,189	2,443	2,882	1,348	1,777	1,860	2,164	2,069

注) 数値は観客数で単位は人。数値の後ろの文字は試合会場を示している。2012 年度は《アルテ高崎》が退会したため他年度より 1 試合少ない。「県陸」は沖縄県総合運動公園陸上競技場、「市陸」は沖縄市陸上競技場、「北谷」は北谷公園陸上競技場、「読谷」は読谷村陸上競技場、「西原」は西原運動公園町民陸上競技場、「西崎」は西崎陸上競技場。JFL オフィシャル Web サイト (<http://www.jfl.or.jp/jfl-pc/view/s.php?a=1>) を基に筆者作成。

キングス)の試合ほど演出に派手さはない。しかし、1 点差で《琉球コラソン》が勝利したという試合内容が観客を大いに盛り上げた。

現地で筆者が観察した 3 試合の結果は、《FC 琉球》対《Y.S.C.C.》が 0 対 3、《琉球ゴールデンキングス》対《京都ハンナリーズ》が 93 対 86、《琉球コラソン》対《豊田合成株式会社ハンドボールチーム》が 27 対 26 であった。筆者自身は、接戦をものにした《琉球コラソン》の試合が最も満足のいく内容であったと感じている。接戦を制すかどうかの微妙な展開が続いた試合終盤、会場の一体感や盛り上がりは最高潮に達し、周囲の観客の懸命な声援につられて筆者自身も自然と《琉球コラソン》を応援していた。試合終了のブザーが鳴った時は感動の瞬間を味わえた。また、大敗した《FC 琉球》の試合を観戦したサポーターと違い、ほとんどのファンが笑顔で会場を後にしていた。友人同士や家族の間で試合内容について語り合い、感動を共有している様子で、興奮の余韻に浸ったままそれぞれが家路についていた。それは、スポーツの本質が「勝負」であり、そのことが「観るスポーツ」の基盤となっているからであろう。ブレイク (2001, p.49) はスポーツを以下のように定義

している。

スポーツは、官僚制によって規定され、許可された時間および場所の範囲内で、人間もしくは動物に対し容認された行為を管理し、個人あるいはチームが設定された目標を達成したときに勝利の栄光を授与することを定めたルールに従って、個人あるいはチームが身体による技術を広く実践する行為である (傍点は筆者補足)。

《FC 琉球》は、JFL に参入した 2006 年度以降、成績が中位から下位に留まっている。それについて D 氏は次のように語る。

かりゆし (沖縄かりゆし FC) が分裂して、ラモス²¹⁾さんとかがいっちゃう後、与那城ジョージさんが監督されてるとき²²⁾って、お客さん 3 千人とか 4 千人とか入ってるんですよ。(中略) トルシエさんという広告塔とは来た方がいいものの、(中略) あんまりサッカーよくわかんないなかで、応援したって、結局負け続けて、その負けても、やっぱり本気出して悔しがるとか、全力出して、試合終わった後へたれこむとか、そういうのもなかったんで、だんだんお客さんが離れていく時期だったんで。

[発言 16 : D 氏]

《FC 琉球》の1試合平均観客数は、JFLに参入した2006年度が3,189人であり、2013年度までで最も多い(第6表)。2007年度に減少したものの、トルシエ氏が総監督に就任した2008年度は増加した。しかし、成績が悪かったこともあり、2009年度は大幅に減少したが、順位が上がった2010年度は再び増加に転じた。2012年度からは、成績は中位が続くものの、観客数は1万人祭りの影響で2,000人強を維持している。ただし、《FC 琉球》は同祭りにおいて2年連続で敗北している。E氏は勝負に勝つことの重要性を主張する。

1万人祭りのみみたいな試合で、やっぱり必ず勝つ。勝ちにいったほしい。勝つことが大事。ファンへの恩返しになる。それは、もうどのチームもです。《FC 琉球》しろ、コラソンにしろ、キングスにしろ。

[発言17:E氏]

《琉球ゴールデンキングス》は、発足2年目でbjリーグを優勝し、以降、毎年優勝争いに加わっている。観客数は2度目の優勝を果たした2011度まで増加している。そのことについてI氏とM氏は以下のように語る。

(地域に根差すためには)とりあえず勝つ。勝ってやっぱり紙面に出る、ニュースに出る、沖縄県民に知ってもらう。一応は、よく言う、地域周り、小学校周りとかは、もちろん必要だと思うけど、やっぱり勝っていかないことには観てもらえないからな。勝ったら、スポンサーの風向きも変わる。キングスで体験した。ガラッと変わった。

[発言18:I氏]

(キングスがbjリーグに参入した初年度の)最下位のときって、そんな満員になってないじゃん。で、翌年になって優勝でしょ。そりゃ楽しいさ。だって、沖縄で、プロスポーツで優勝したの初めてだもんね。(中略)強くないとだめですよ。強くなって、行ったら、勝ったから、楽しかったっていうことにならないと。それが一番大事でしょ。

[発言19:M氏]

このように、サポーターたちは良い試合内容で勝利することを《FC 琉球》に求めている。サポーターだけでなく、沖縄県庁担当者によれば、《FC 琉球》の勝利は行政やサポーターを含む県全体の一番の支えになり、そこから沖縄県における支援が拡大していく可能性があるという。《FC 琉球》担当者によれば、J3参入が決定したことで沖縄県内の支援が拡大

しそうな雰囲気を感じているものの、「でも勝たないとね」とさまざまな場で言われているという。また、ある県内の高校野球の監督には、「沖縄の人は勝たないと観てくれない」と言われたという。

I氏、G氏、M氏、H氏は、沖縄県の県民性について以下のように語った。

沖縄の難しいところなんだろうなと思う。沖縄は沖縄のことを好きなんだけど、でもじゃあ弱いでしよって、一言で終わってしまう悲しさがあるから。C代表には、強いチーム作って、ぜひ見返してほしい。

[発言20:I氏]

G氏:沖縄の人たちの県民性とかを考えたとき、たとえば、高校野球の熱狂の仕方を見たときに、何かその文化がサッカーになじんでいったとき、あの熱狂がサッカーに向けたときのすごいパワーがある。それは、時間がかかるよ。

M氏:全体から言っても、強い沖縄じゃないとダメなんです。弱い沖縄だと恥ずかしいっていうのがある。

G氏:そう。ある意味、熱狂という圧縮したパイで、すごい熱量を発せられる地域ではある。他から観れないし、他に観に行けないから。

H氏:そうそう。

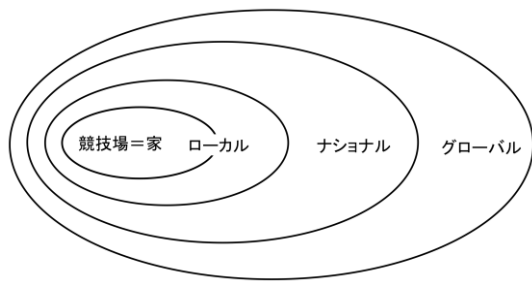
[会話7:G氏、M氏、H氏]

一方、《FC 琉球》が発足した当初から応援を続けているL氏は、長期的な視点で当該クラブの状況を捉えている。

もともと、かりゆしFCっていうチームができて。だけど、あそこから選手が一斉に退団して、できたのが《FC 琉球》だった。で、そういう選手たちが一生懸命頑張ってたって、なんだけど、頑張ってた選手たちを一斉に解雇したとき²³⁾があって。で、そのときに、やっぱり、選手を応援しているサポーターが、まず一回離れた。で、その後に、やっぱり、なかなかその、チームが毎年、残留どころか、チームが(経営難で)無くなりそうなところをうろうろしているってなかで、どうしても強いチームじゃないと、沖縄の人って応援しない風潮みたいなのがあって、少しずつファンが減るなか残ってて、今いる人たちっていうのは、多分もう、まず離れることはない。それでもやっぱり応援したいという人たちが、来てくれてるんで。あと、もう本当に、チームとして、もっと沖縄の人に、応援してもらえるようなチームになる。強くなるのが別に必須じゃなくて、でも強くなってもらわないと困るんですけど。それはもう、短期間でできることではないということで、ちょっとずつ強くなっていくしかない。

[発言21:L氏]

《FC 琉球》の試合の観客数は、2006年度を除き、



第 15 図 競技場を中心とするマルチスケールの「地域」

J リーグの入会条件である 1 試合平均 3 千人を超えていない (第 6 表)。*《FC 琉球》* はナショナル・グローバルスケールへと活動基盤を拡大しているが、「沖縄県」というローカルな地域に根差すためには、「競技場における試合時間 90 分」という限られた時空間に目を向けるべきなのかもしれない。

V おわりに

1. マルチスケールの「地域」像

本研究では、*《FC 琉球》* の J リーグ入会を目指した活動の展開と、当該クラブにとっての「地域」について検討した。その結果は以下のように整理される。

《FC 琉球》 とその関係者たちは J リーグ入会を果たすために、試合会場、練習場、支援体制、組織運営を確立しながらマルチスケールで活動を展開してきた。現在、当該クラブは、観光と関連づけた「観るスポーツ」による経済効果を強調することでローカルスケールの支援体制を構築している。また、運営組織をナショナルスケールからローカルスケールへと移行させることで、「沖縄県」という地域との結びつきを強めている。その一方、スポンサー企業や選手をナショナル・グローバルスケールで獲得しようとする動きもある。筆者が聞き取りを行ったサポーターたちも *《FC 琉球》* の基盤は「沖縄県全県」であり、それが、当該クラブが根差すべき「地域」であると考えている。ただし、*《FC 琉球》* が県外に活動を展開していくことも支持している。それは彼らが、ホームスタジアムにおける試合での勝利を求めているからである。

以上を踏まえて筆者は、各主体はまず「競技場」という最もローカルな場に目を向ける必要があると考える。各主体は試合会場となる競技場のハード面、ソフト面での充実化を図り、ペイル (1997) がいう

ところの「家」を作り出さなければならない。行政は設備を整え、サポーターは応援を通じて会場内の雰囲気を高揚させ、協議会はそれらをサポートし、そして何より *《FC 琉球》* は良い試合内容で勝利する。本稿の結果を踏まえれば、それらはおのずとマルチスケールの活動になると考えられる。確かに *《FC 琉球》* とその関係者たちの活動はマルチスケールで展開しているが (第 10 図)、それぞれの視線はさまざまな方向を向いているように思われる。今後は各主体が、第 15 図のような「競技場=家」を中心に据えたマルチスケールの「地域」像を思い描き、自らの活動を「競技場における試合時間 90 分」という時空間と関連づけていくべきであると筆者は考える。

日本のプロスポーツはローカルな地域を志向するようになってきているが、活動範囲は決して特定の行政区域には収まらない。チームに関係する各主体の思惑や戦略によってさまざまなスケールの「地域」が設定される。本稿のようにプロスポーツチームにとっての「地域」をマルチスケールの視座から検討していくことも重要であろう。

2. 勝負事・「地域」らしさ・競技場

サポーターが勝負にこだわるのは *《FC 琉球》* に限ったことではない。会話 4 で M 氏が述べたように、他のサッカークラブも勝利を求めて他地域の選手を獲得しており、それは一般的なことである。同会話内において N 氏は「沖縄は勘違いして、沖縄だから沖縄じゃないといけない、いけないと思ってるだけ」と述べている。最後にこの点について考察を加えたい。

プロスポーツチームの活動はマルチスケールで展開するため、チームに関与する主体は常に自らとチームがどの「地域」に帰属しているか (以下、地域アイデンティティと表記) を問われるであろう。たとえば上述のように、一部の沖縄県民は *《FC 琉球》* に「沖縄県らしさ」(沖縄県への帰属) を求めている。J リーグも各クラブがローカルな「地域」に根差すことを奨励している。これに関連して会話 6 では *《アスレティック・ビルバオ》* の「バスク純血主義」の話が出てきた。Shulman (2004) も *《アスレティック・ビルバオ》* のことを「正真正銘のローカルなチーム」と表現している。筆者は以前、*《アスレティック・ビルバオ》* を介して構築される地域アイデンティティについて検討したことがある (藤川, 2012, 2013)。そこで、ここでは二つのクラブの比較を通じて、勝負事というプロスポーツの性質、「地域」らしさ、競

技場の三つの関係を考えてみたい。

《アスレティック・ビルバオ》のあるバスク地方は、カルリスタ戦争やスペイン内戦等の政治的動乱と産業革命後の他地域からの労働力の流入を背景に「バスク・ナショナリズム」を高揚させてきた。《アスレティック・ビルバオ》の「バスク純血主義」もそうした歴史の上にあり、バスク・ナショナリズムが高揚する中で「選手はバスク人のみ」という理念を採用するに至り、現在までその方針を貫いている。また、クラブの財政は会員（通称「ソシオ」）の出資によって決定される。会長や管理職などもソシオから選出され、クラブの運営は事実上ソシオが行っている。そしてその大半はバスク地方の住民である。

選手構成と経営面で地域主義的・民族主義的な側面を見せる《アスレティック・ビルバオ》であるが、そうした思想は監督職や競技のプレイスタイルには及ばない。当該クラブは他地域の出身者を監督にし、その下で「《アスレティック・ビルバオ》らしい」プレイスタイルを築いてきた。元々《アスレティック・ビルバオ》は、労働力として流入してきたイングランド人がサッカーをバスク地方に広めたことをきっかけとして 1898 年に創立された。当初はイングランド人監督を招聘し、イングランド伝統の「キック＝アンド＝ラッシュ」というスタイルこそが《アスレティック・ビルバオ》の戦術である、といわれてきた。最近ではアルゼンチン出身者が監督に就任したことで、そうした「《アスレティック・ビルバオ》らしさ」が 180 度転換したとされている。

また、選手構成も厳密に言えば「純血」であったことは一度もない。どの時代においても常に移民の子孫たちが在籍しており、「純血」の定義はそれほど厳しくない。現在はバスク地方出身者、もしくはバスク地方で生まれなくても幼少の頃からバスク地方で選手として育った者であればクラブ員になれるとされている。

こうした《アスレティック・ビルバオ》の試合を観戦するバスク地方の住民たちは、それによって多様な地域アイデンティティを構築している。筆者の調査（藤川、2012）によれば、住民は、最も最真にしているクラブ、自らと選手の出身地、クラブが所属する「バスク地方」という地理的範囲、バスク地方の内側の政治的境界線、クラブのプレイスタイル、ライバルクラブの帰属地等をそれぞれ比較しつつ、各々の「バスクらしさ」を醸成している。たとえば、筆者が《アスレティック・ビルバオ》のホームスタジアム「サン・マメス」で試合を観戦した際、隣に

座ったバスク人の中年女性は、「サッカーは嫌いだけど、《アスレティック・ビルバオ》は特別な感情。応援しなきゃ！」と語った（藤川、2013, p.71）。一方、バスク自治州ギプスコア県にある《レアル・ソシエダ》を応援する人々は、たとえ同じバスク人であっても、試合になると《アスレティック・ビルバオ》にブーイングを浴びせる。なぜなら、《アスレティック・ビルバオ》はギプスコア県に隣接するビスカヤ県に本拠地があり、ライバル関係にあるからである。

《アスレティック・ビルバオ》に関わる人々は、ローカルな地域アイデンティティを重視しながら、試合での勝利も優先している。当該クラブはスペインリーグ優勝 8 回、国王杯優勝 23 回を誇り、2 部リーグに一度も降格したことがない。そこからわかるのは、現代のプロスポーツで求められる「地域」らしさと、プロスポーツが普遍的に有する「勝負事」という性質は決して対立するものではなく、互いを規定し合う関係にある、ということである。そして両者を結びつける場として競技場が存在している、と筆者は考える。《アスレティック・ビルバオ》のホームゲームの平均集客率は約 88% であり、「サン・マメス」は毎試合異様な雰囲気にも包まれる。競技場で湧き上がる熱気に直接的・間接的に触れることで各自が帰属する「地域」が生まれ、変化し、それがさらなる熱気をもたらす。「地域」らしさは選手の「血」には還元されず、競技場で繰り返し行われる試合を通じてその都度浮かび上がる。そして、競技場を家（ホーム）と感ずることで「アウェイ」や「ライバル」といった概念が際立ち、プロスポーツの「勝負事」という性質が浮き彫りになるのではないだろうか。沖縄県外出身者である筆者が〈琉球コラソン〉の試合を観戦して体感したものは、まさにそうした競技場＝家における地元住民の勝負に対する熱気であった。その時ばかりは自らの出身地や居住地は頭から消え去り、地元住民とともに「沖縄県のチーム」を応援していた。

翻って《FC 琉球》はどうだろうか。地域住民主体の経営体制が採用されていたり、選手構成に「沖縄県らしさ」を求めたりする人々がいる点は《アスレティック・ビルバオ》と類似する。しかし競技場＝家がまだ不完全であるせいか、それらが勝負事というプロスポーツの本質（ブレイク、2001, p.49）と結びついていないように思われる。「地域」らしさを求めることは重要であるが、勝負にこだわるというプロスポーツの普遍性を忘れてはならないだろう。

（元首都大学東京大学院生）

付記

沖縄県では多くの方々から貴重なお話を伺うことができました。調査にご協力していただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

なお本稿は、2014年3月に首都大学東京大学院都市環境科学研究科へ提出した修士論文を大幅に加筆・修正したものであり、その骨子は2014年2月に行われた経済地理学会関東支部例会で発表した。

修士論文を脱稿後、《FC琉球》の状況に大きな変化がみられたので補足しておきたい。まず、2012年から実施されていた沖縄県陸の改修工事が2015年に完了した。この工事によって1万人以上を収容できる座席数が確保され、試合の様子を映し出す大型モニターやナイトゲーム用の照明設備が新設された。沖縄県陸は県内初のJ2規格競技場となった。

これに伴い、2017年9月、《FC琉球》はJリーグの運営母体である公益社団法人日本プロサッカーリーグからJ2クラブライセンスを交付された。これにより順位等の条件を満たせばJ2リーグに昇格できるようになった。ただし、クラブ経営上是正すべき点があるとして、次の三つを通達されている。すなわち、①2017年度予算進捗をJリーグに定期的に報告すること、②2018年度予算編成時にJリーグに事前に説明すること、③ガバナンスの改善や内部統制の見直しを実施し、Jリーグに進捗状況を報告すること、である。

さらに、2017年10月、沖縄県は那覇市にJ1規格のスタジアムを建設することを発表した。2万人以上を収容可能にし、オリンピック代表戦やラグビーの試合にも対応する予定であるという。県スポーツ振興課は『琉球新報』の取材に対し、「県内からJ1チームを出すためにもスタジアムは必要だ。市街地に造ることで周辺への集客に寄与したい」と語っている（『琉球新報』2017年10月17日）。競技場＝家のハード面は着実に整ってきているといえよう。

運営面では、2015年から2016年末までの約1年半で代表取締役社長が3度交代された。2016年12月には立て直しのために経営陣の刷新が行われ、沖縄県外出身でスポンサー企業社長のS氏が就任した。2017年8月末時点のシーズン中の観客動員数が前年比240%の平均3,136人になったことを受け、S氏はスポンサーや自治体等との取り組みの強化や魅力的なサッカーを展開したことなどを評価し、「経営改善の一定の成果として支援の輪の広がりを感じる」と述べた（『琉球新報』2017年9月28日）。2017年度はクラブにとってJ3最高順位となる6位を記録した。

注

- 1) 例外として、東京都をホームタウンとする《FC東京》と《東京ヴェルディ》は、中心となる市区町村を設定していない。
- 2) ホームスタジアムを建設できない場合、サッカー協会および自治体が、基準を満たす競技場を整備する必要があることを認識し、整備に向けて取り組む意向があることを文書で示せばよいこととなった。
- 3) 2012年度のJFLは、《アルテ高崎》が運営会社の経

営が困難になって退会したため17クラブで構成された。

- 4) 《FC琉球》公式サイト「J3創設を受けて記者会見」
<http://fcryukyu.com/information/event.php?id=136266661>
9（最終閲覧日：2014年1月6日）。
- 5) 沖縄県は、2011年度に「Jリーグ規格スタジアム整備基礎調査事業」、2012年度に「Jリーグ規格スタジアム整備基本構想策定事業」を立ち上げ、沖縄県に適したサッカー専用スタジアムを整備するための候補地や施設規模を策定している。
- 6) 1982年から沖縄市で春季キャンプを行っている。
- 7) 沖縄県陸で行われる《FC琉球》の試合に1万人以上の観客動員を目指すものであり、飲食店の出店や地元歌手のステージ等が設けられ、試合観戦以外にも観客が楽しめるようなイベントとなった。
- 8) 本稿では人名を、登場した順番に従ってA、B、C…とアルファベット順で示す。
- 9) 《FC琉球》公式サイト「運営会社移管を発表」
<http://fcryukyu.com/information/event.php?id=137776399>
6（最終閲覧日：2014年1月6日）。
- 10) この時、B氏は会長であった。
- 11) Jリーグアジア戦略の理念を、日本国内のみならずアジア各国でより多くの人々に伝える役割を担う人のこと（Jリーグ公式サイト「アジアアンバサダー就任決定のお知らせ」<http://www1.j-league.or.jp/release/000/00004510.html> 最終閲覧日：2014年1月6日）。
- 12) 獲得した選手のうち一名のFacebookには17万人のフォロワーがいる。
- 13) NHKオンライン「Jリーグはアジアを目指す」
<http://www.nhk.or.jp/ohayou/marugoto/2013/04/0401.html>
（最終閲覧日2014年1月6日）。
- 14) たとえば、タイ、ベトナム、ミャンマー、カンボジア、シンガポール、インドネシアのプロリーグとパートナーシップ協定を締結している。また、2014年度からは、「Jリーグ提携国枠」が外国籍選手枠で新たに導入される。Jクラブは、外国籍選手3名とアジアサッカー連盟加盟国の国籍を有する選手1名に加えて、Jリーグ提携国の国籍を有する選手1名を登録できるようになる。
- 15) 2008年度に《FC琉球》の総監督に就任したフィリップ・トルシエのことを指している。1998年から2002年までサッカー日本代表の監督を務めた。
- 16) 《京都サンガFC》(J2)の出資会社のことを指している。
- 17) 2009年度以降、毎年1、2回開催されている。
- 18) スペイン・バスク地方に本拠を置き、スペインのプロサッカーリーグ1部に所属するサッカークラブ《アスレティック・ビルバオ》のことを指している。当該クラブには、「選手はバスク人のみ」という方針があり、日本においてそれは「バスク純血主義」などと報道される。
- 19) 沖縄県出身のサッカー選手である我那覇和樹のことを指している。2006年に、県内出身の選手として初めて日本代表に選出された。2011年度から2013年度まで《FC琉球》に在籍し、2014年度に移籍する。

- 20) 《FC 琉球》は、沖縄市民を試合会場に無料で招待する企画を実施することもある。
- 21) 《沖縄かりゆし FC》のテクニカルディレクターを2001年度から2002年度まで務め、《FC 琉球》の発足にも携わったラモス瑠偉のことを指している。ラモス氏がテクニカルディレクターを解任された後、《沖縄かりゆし FC》から選手が集団退団した。
- 22) 2004年度から2006年度まで《FC 琉球》の監督を務めた。
- 23) 《FC 琉球》は、2007年11月、発足時からの選手を含む11人を解雇し、引退選手などと合わせて計18人がクラブから退団した。2007年12月にサポーターの有志は、選手の解雇撤回を求める公開要求書をクラブに提出した。琉球グラナスの代表によれば、このとき、サポーターの中でも意見が分かれたという。当時、サポーター団体は「ベンガラーズ」という名称だったが、これをきっかけに、新たに琉球グラナスを作った。

文 献

- 内海和雄 (2007): 『プロ・スポーツ論—スポーツ文化の開拓者』創文企画, 215p.
- 川久保篤志 (1998): プロサッカーチームの誘致と地域振興—静岡県磐田市を事例に。新地理, **46**, 28-39.
- 木村達郎 (2009): 『琉球ゴールデンキングスの奇跡』学習研究社, 239p.
- 呉羽正昭 (2002): 日本におけるスキー人口の地域的特徴。筑波大学人文地理学研究, **26**, 103-123.
- 齋藤弘樹・川原 晋 (2012): 地域におけるホームタウンスポーツの役割に関する研究—東京都町田市のサッカーを事例として。観光科学研究, **5**, 35-43.
- 柴田勇樹 (2011): プロスポーツクラブにおける地方自治体との関係に関する研究—Jリーグ加盟を目指すクラブおよびJリーグ加盟後間もないクラブを対象にして。早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文。
- 杉本尚次 (1999): ベースボール・スタジアムと都市環境—スポーツ地理学。人文論究, **49**, 1-19.
- 寺阪昭信 (2006): サッカーと地域の結びつき—ドイツを中心として。流通経済大学論集, **41**, 31-46.
- 内閣府沖縄総合事務局 (2013): 『沖縄県経済の概況』<http://www.ogb.go.jp/soumu/003093.html> (最終閲覧日: 2014年1月6日)。
- 永山淳一 (2010): 茨城県鹿嶋市における鹿島アントラーズと地域社会との関係。学芸地理, **65**, 47-59.
- 日本経済研究所 (2009): 『Jクラブの存在が地域にもたらす効果に関する調査』http://www.jeri.co.jp/solutions/pdf/solution_01.pdf (最終閲覧日: 2014年1月6日)。
- 藤川慎也 (2012): サッカークラブと地域の関係性—Athletic Club de Bilbao を介したバスク・アイデンティティの社会的構築。2011年度横浜国立大学教育人間科学部卒業論文。
- 藤川慎也 (2013): サッカーは嫌いだけど、A・ビルバオは応援しなきゃ！と隣のオバさんが言った。菅原千代志・山口純子著: 『スペイン 美・食の旅 バスク&ナバーラ』平凡社, 70-71.
- ブレイク, A. 著, 橋本純一訳 (2001): 『ボディ・ランゲージ—現代スポーツ文化論』日本エディタースクール出版部, 360p.
- Blake, A. (1996): *The Body Language: The Meaning of Modern Sport*, Lawrence and Wishart, London, 222p.
- ベイル, J. 著, 池田 勝・土肥 隆・高見 彰共訳 (1997): 『サッカースタジアムと都市』体育施設出版, 323p.
- Bale, J. (1993): *Sport, Space and the City*, Routledge, London, 211p.
- 御園慎一郎 (2012): わが国の近年のスポーツ政策と地域活性化。東邦学誌, **41**, 137-145.
- 武藤泰明 (2009): プロスポーツクラブの地域密着活動の意味と意義は何か。調査研究情報誌 ECPR, **25**, 3-8.
- 山崎孝史 (2005): グローバルあるいはローカルなスケールと政治。水内俊雄編: 『空間の政治地理 (シリーズ人文地理学第4巻)』朝倉書店, 24-44.
- 山崎孝史 (2011): 政治地理学におけるスケール論の展開—概念の特徴, 限界, 可能性。地域社会学会会報, **167**, 17-18.
- 山田耕生 (2009): プロサッカークラブの本拠地におけるサッカーのまちづくり—浦和レッズとさいたま市浦和地域の事例。共栄大学研究論集, **7**, 107-121.
- Bale, J. (1988): The place of 'place' in cultural studies of sports. *Progress in Human Geography*, **12**, 507-524.
- Bale, J. (2003): *Sports Geography - 2nd ed.* Routledge, London, 196p.
- Fløysand, A. and Jakobsen, S. E. (2007): Commodification of rural places: A narrative of social fields, rural development, and football. *Journal of Rural Studies*, **23**, 206-221.
- Hague, E. and Mercer, J. (1998): Geographical memory and urban identity in Scotland: Raith Rovers FC and Kirkcaldy. *Geography*, **83**, 105-116.
- Rosso, E. (2007): The spatial organisation of women's soccer in Adelaide: Another tale of spatial inequality? *Geographical Research*, **46**, 446-458.
- Shobe, H. (2008): Football and the politics of place: Football Club Barcelona and Catalonia 1975-2005. *Journal of Cultural Geography*, **25**, 87-105.
- Shulman, J. (2004): The last genuine local team: Athletic Bilbao surviving in the Spanish League. *Dialogues@RU*, **3**, 55-71.
- Storey, D. (2011): Football, place and migration: Foreign footballers in the FA Premier League. *Geography*, **96**, 86-94.
- Wagner, P. L. (1981): Sport: Culture and geography. Pred, A. ed.: *Space and Time in Geography: Essays Dedicated to Torsten Hägerstrand*. CWK Gleerup, Lund, 85-108.